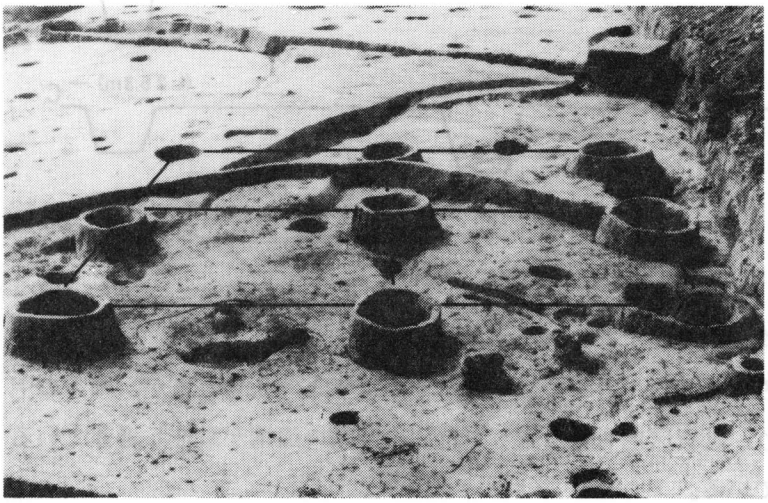
径1.5cm程の円形の孔が認められた。また、ここからは多量の須恵器・土師器の他に大型草食獣の顎骨が出土しているが、これは鑑定の結果牛のものであることが判明した。

これらの遺物の出土状況からみて、ＳＤ－02は自然に埋没したものではなく人為的に埋め戻されたものであり、出土した遺物群は溝の埋め戻しの途中で行なわれた何らかの祭事の痕跡ではないかと考えられる。

ＳＢ－02・ＳＤ－04

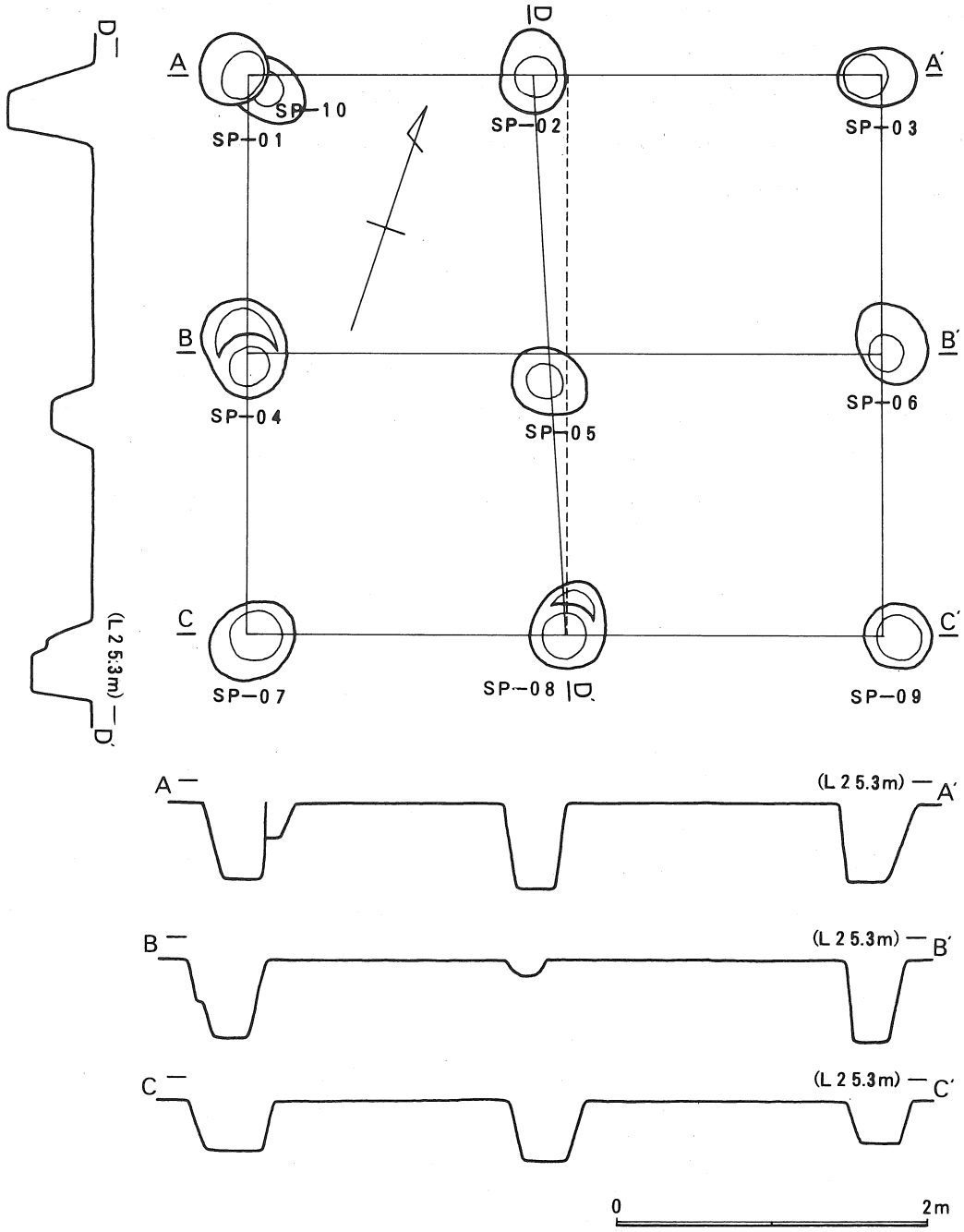
ＳＢ－02はＢ－６グリッドの東側からＣ－６グリッドの西側にかけて検出された、ＳＰ－01～09の11個の柱穴によって構成される掘立柱の建物跡であり、主軸はＮ－18°－Ｗ方位を向いている。柱穴はいずれも掘り方が50～60cm程のもので、黒色粘性土の埋土中からは弥生土器片と伴に少量ではあるが須恵器片も出土しており、古墳時代以後の遺構であると考えられた。ＳＢ－02は調査区の西壁添いで検出されたため、ＳＰ－01・04・07の延長上に幅60cmのトレンチを設定してみたが他に柱穴は認められず、二間・二間の規模であることが判明した。

ＳＢ－02の周辺には、これに伴う同時期の遺構としてＳＤ－04が認められた。ＳＤ－04はＣ－７グリッドの南西隅からＮ－約10°－Ｅ方位に向かって延びる、幅40～50cm・深さが20～25cmのＵ字形の断面を呈する溝で、Ｃ－８グリッド南端でＳＤ－01に流れ入んでいる。ＳＤ－04の埋土はＳＤ－01と同じ様に礫や弥生土器片を多く含む黒色粘性土で、遺構の切り合いは認められず、やはり古墳時代後期頃の須恵器や土師器が出土している。ＳＤ－04はＳＢ－02から直線的に北へ向かって延びており、ＳＢ－01に伴うＳＤ－01の関係と同様に、ＳＢ－02に伴う排水施設ではないかと考えられたが、遺構がどれ程削平されてしまっ



第215図

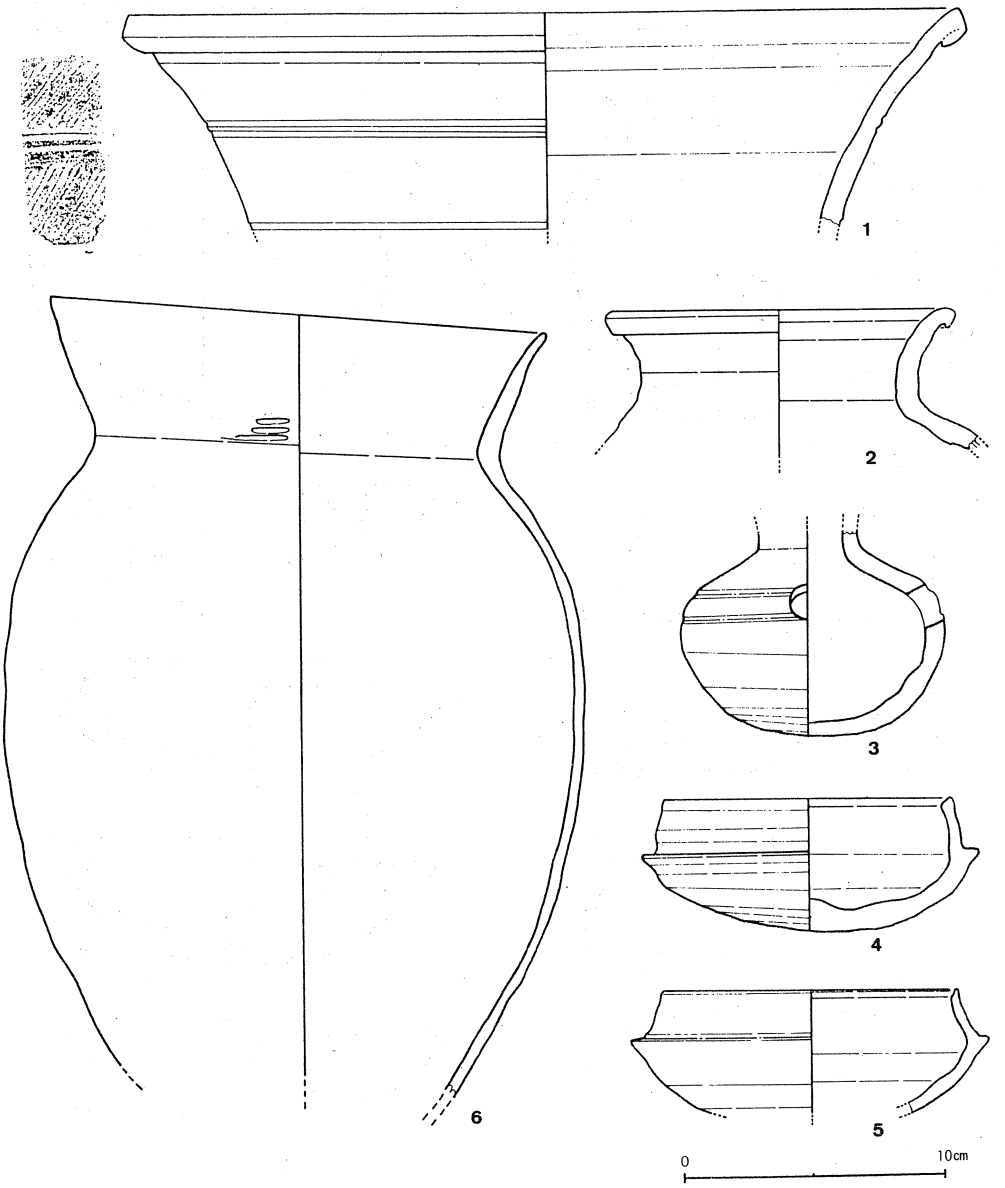
ＳＢ－02（北から）



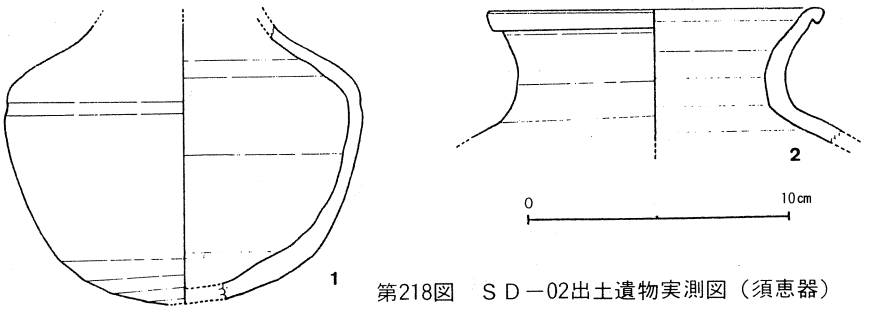
第216図　ＳＢ−02平・断面図

ているかは不明であり、詳細を解明することはできなかった。

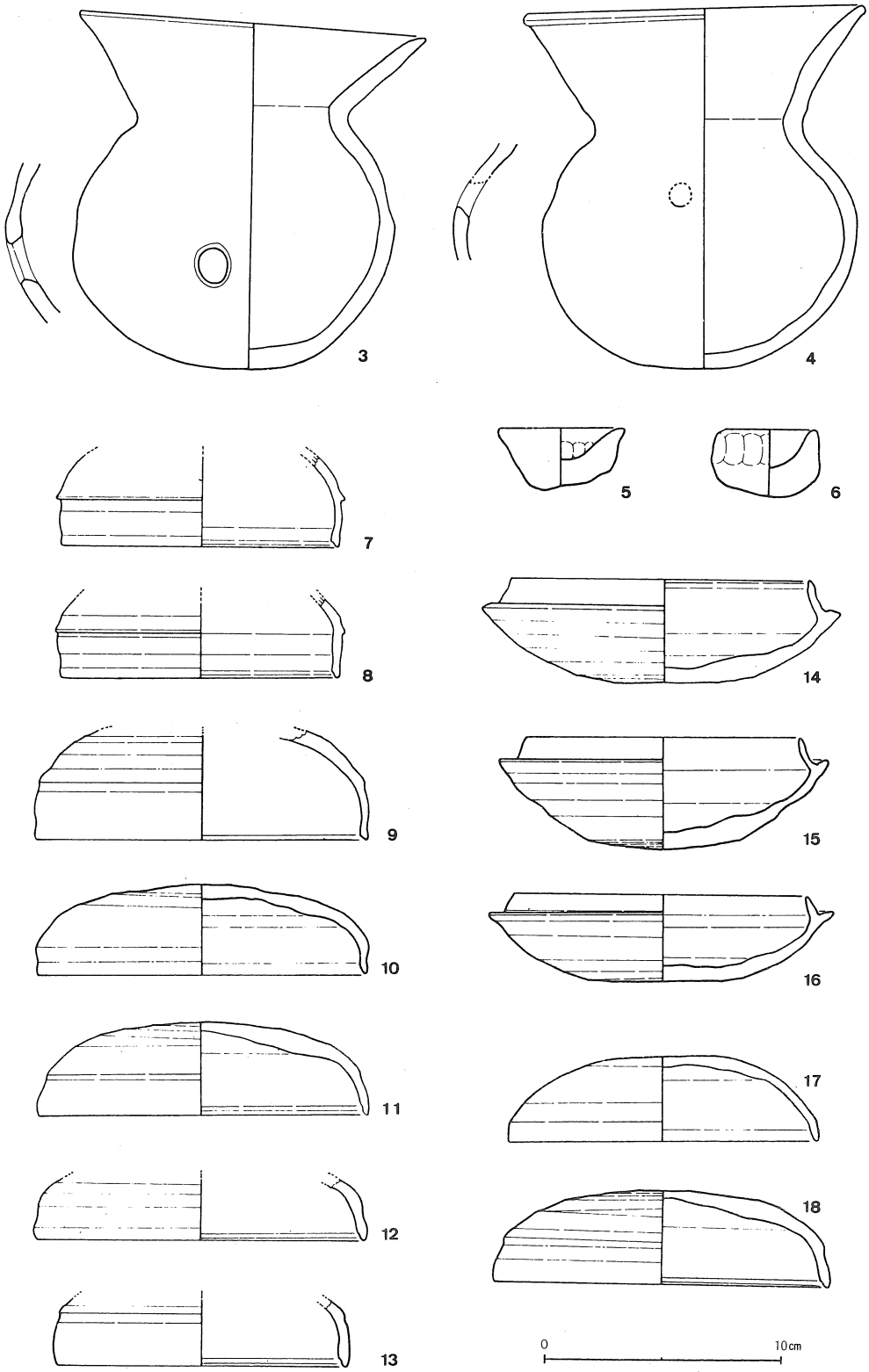
また、以上の状況からみるとＳＢ−01と02は同一時期の遺構と考えられるが、両方の主軸方位が多少異なっており、調査区内を見る限りではこの時期の遺構が散在し過ぎているなど、多くの問題が残っている。



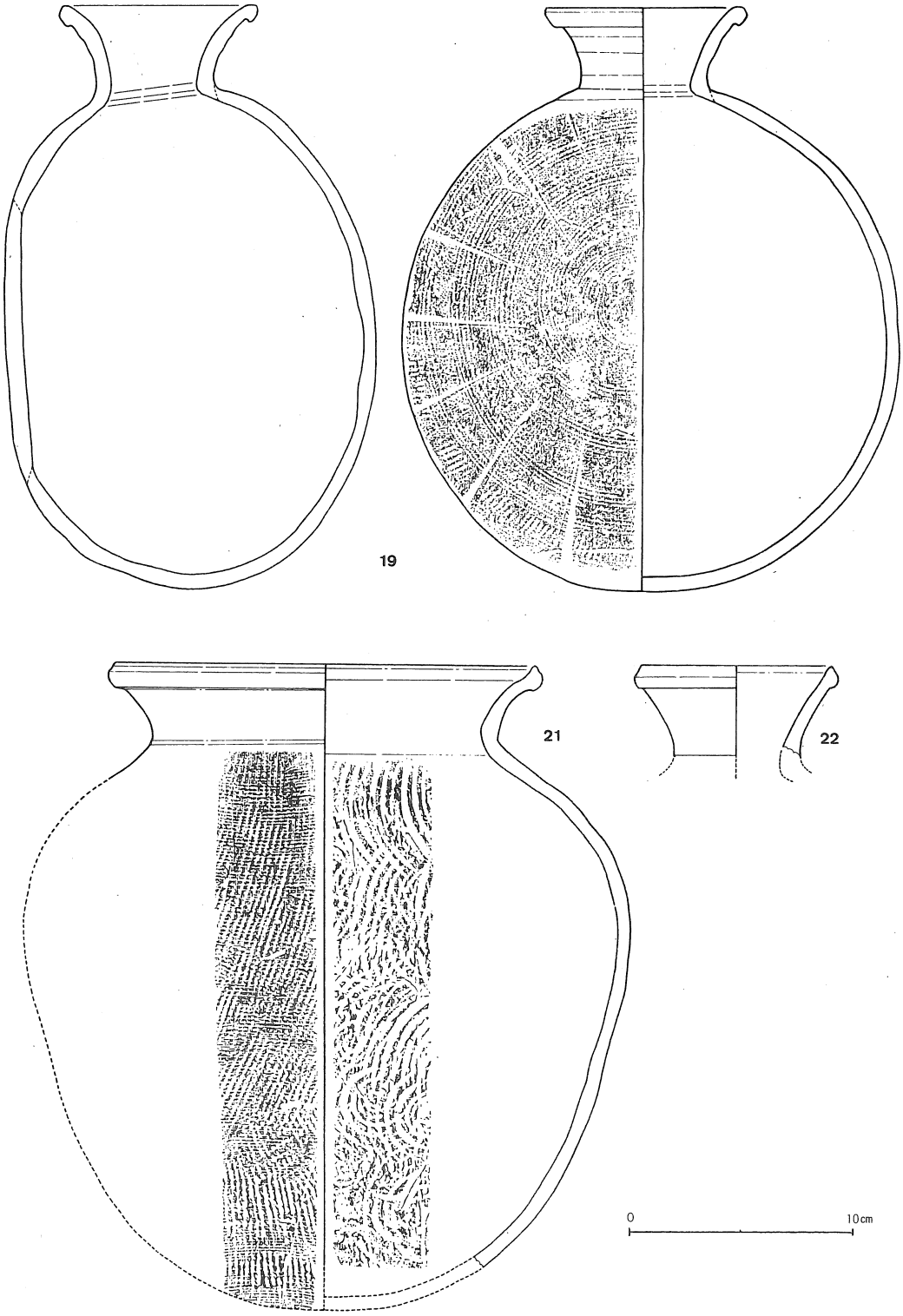
第217図　ＳＤ－01出土遺物実測図（１～５須恵器・６土師器）



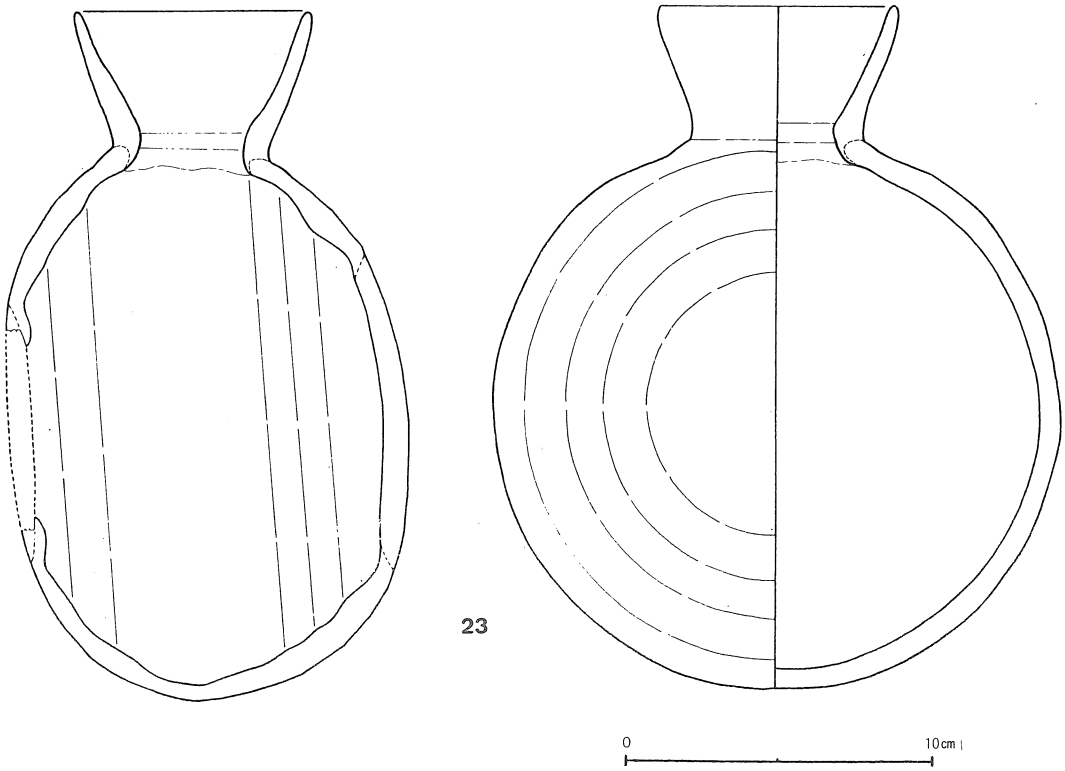
第218図　ＳＤ－02出土遺物実測図（須恵器）



第219図　ＳＤ－02出土遺物実測図（３～６土師器・７～18須恵器）



第220図　ＳＤ－02出土遺物実測図（須恵器）



第221図　ＳＤ－02出土遺物実測図（須恵器）

ＳＤ－05・ＳＤ－06

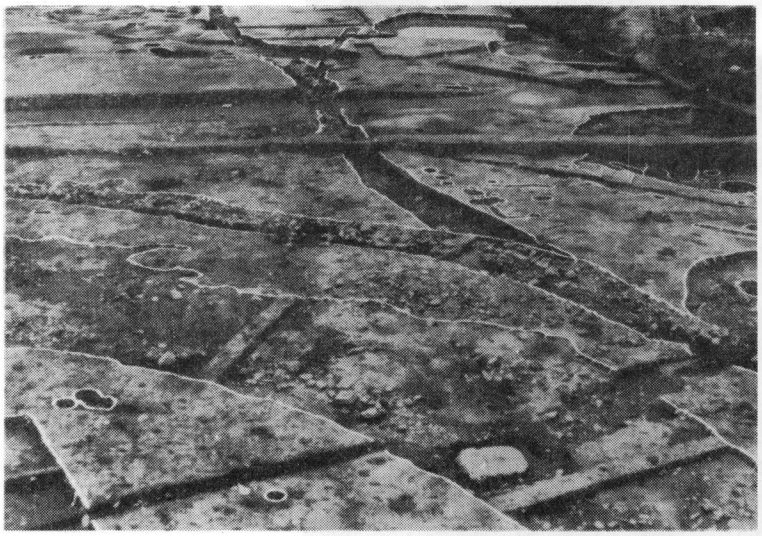
ＳＤ－05は調査区のほぼ中央で検出された幅80～140㎝・深さ20～25㎝の周溝状の溝である。ＳＤ－05の埋土は黒褐色砂質土と極めて多量の礫群であり、数か所で断面を観察したところ周溝の内側から流入し堆積したものであることがわかった。この礫群の中には弥生土器片の他に、古墳時代後期頃の須恵器・土師器片などが多数含まれていたが、ＳＤ－05はＣ－９グリッドの北西隅でＳＤ－01を切っていることから、この溝は古墳時代後期でＳＤ－01廃絶後に構成されたものであると考えられる。また、ＳＤ－05からは調査区の東壁添いで、弥生土器片と伴に銅鏃が一点・磨製石戈か石剣の破片と思われる黒色粘板岩製の石製品一点が出土している。

ＳＤ－05の内側ではこれに添って巡る幅240～440㎝・深さ５～15㎝の溝が検出されており、その遺存状況から、この二本の溝は同じ構造物に伴う遺構であると考えられる。このＳＤ－06はＳＤ－05と比べると浅いが幅は極めて広い。そして埋土は黒褐色砂質土で、溝の内側に添って１㎝前後の小礫が幅１ｍの帯状に堆積しており、その上には大型の礫が多数認められたが、その状況や土層の断面観察によって、溝の埋土は周濠の内側から流入したものである

ことがわかった。また、ＳＤ－06ではＤ－９グリッドから須恵器の大甕が出土している。これは遺構と伴にその大半を失われてはいたが、口縁部の残りは良く、口径が約60cm・胴部最大径が１ｍ近い、極めて大型のものであることがわかった。

ＳＤ－05・06中に認められた礫群は河原石がほとんどであるが、30cm程のブロック状の安山岩も多数認められた。そして、いずれの溝もその内側から流入した砂礫によって埋没しており、内側が高い構造であり多量の礫がそこにあったものと推定されることから、時代的にみて直径が20～30ｍの古墳（多角形墳）の基底部（ＳＤ－06）と周濠（ＳＤ－05）ではないかと考えられる。しかしながら、この遺構は北側を攪乱されてしまっており、東側が調査区外であることから全体的な形態を把握することはできなかった。

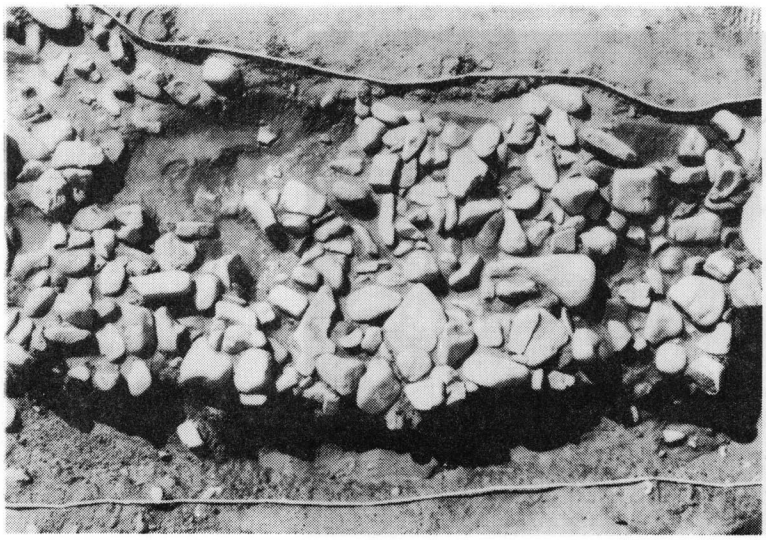
※弘田川の下流西岸には、平地中に古墳時代後期頃の盛土山古墳が存在している。これは



第222図

上からＳＤ－01・05・06

（北から）



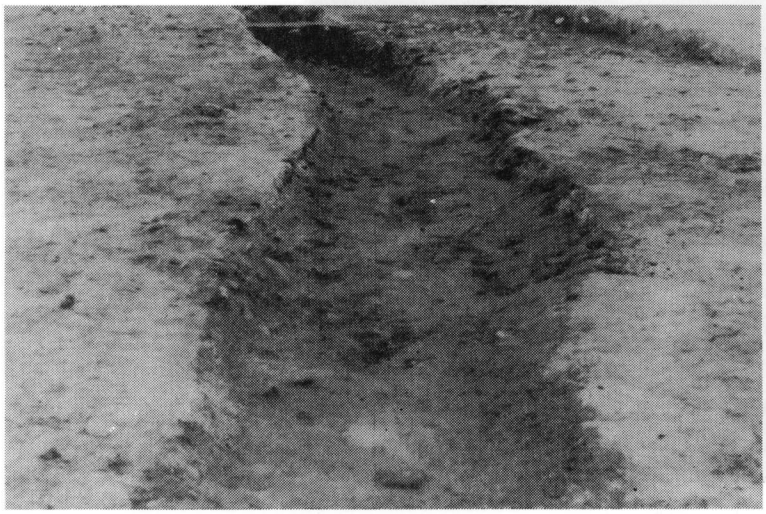
第223図

ＳＤ－05検出状況

第224図

ＳＤ－05検出状況

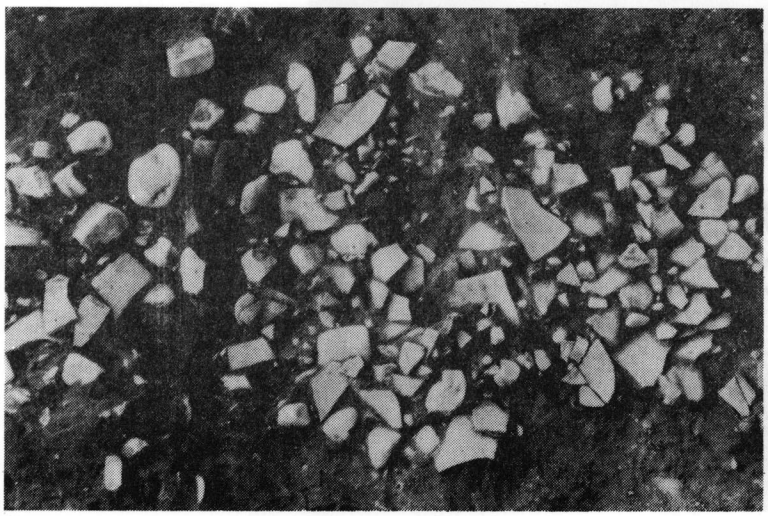
（西から）



第225図

ＳＤ－05埋土除去後

（西から）

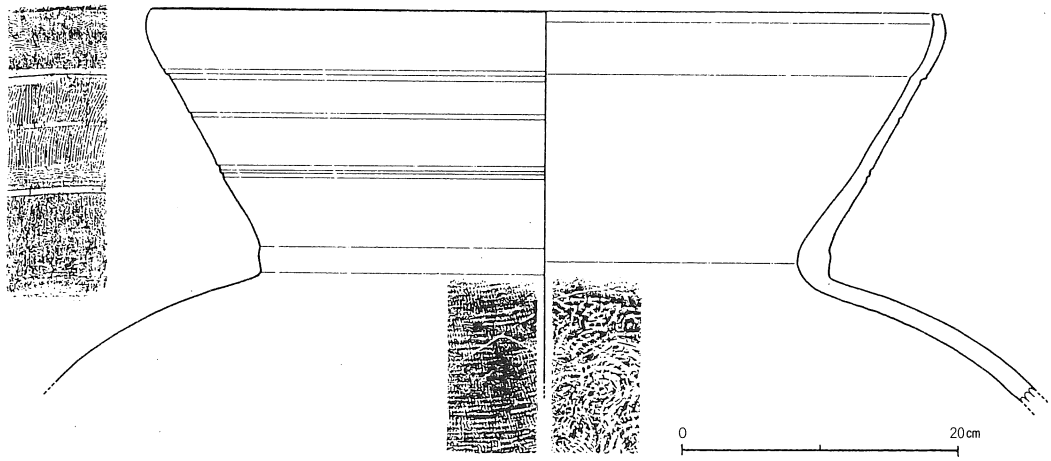


第226図

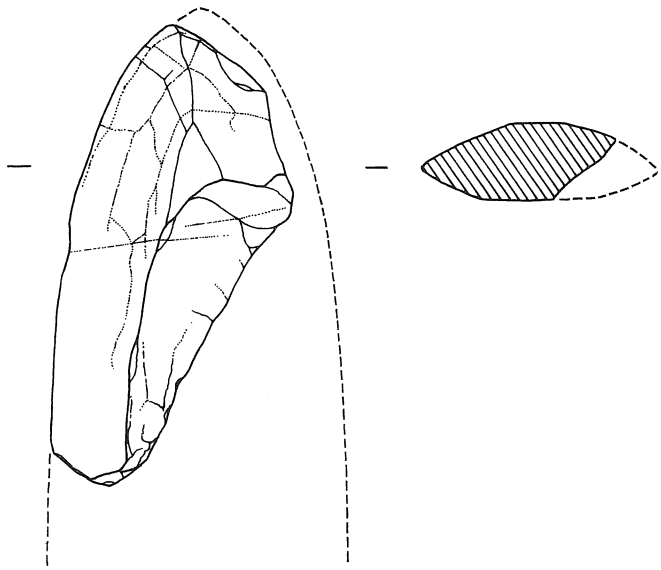
ＳＤ－06

須恵器大甕出土状況

推定復元径48m・高さ5.7mの二段築の大型円墳であり、墳丘盛土が非常に多くの円礫を含む砂質土で、周辺を掘り下げて盛り土が行なわれていることと周濠が存在していたことが知られている。



第227図　ＳＤ－06出土須恵器大甕実測図



第228図　ＳＤ－05出土磨製石製品実測図（原寸）

4. 獣骨・炭化物分析表

彼ノ宗遺跡出土遺物分析表　　古市 光信

獣骨類

No	出土場所	内容	備考
1	ST－02埋土	イノシシ　臼歯片	
2	ST－02埋土	イノシシ　切歯片	
3	ST－06埋土	イノシシ　左下第3大臼歯	
4	ST－01床面直上	イノシシ　臼歯片	
5	ST－02埋土	イノシシ　臼歯片	4個の炭化種子が伴出
6	SP－Ⅱ埋土	シカ　臼歯片	
7	SD－01埋土	イノシシ　右下第3大臼歯	
8	ST－17埋土	シカ　臼歯片	
9	C-8グリッド攪乱層	草食獣（ウシ・シカ類）臼歯片	
10	ST－09床面直上	不詳骨片（イノシシ臼歯片？）	
11	ST－26床面直上	不詳骨片（イノシシ臼歯片？）	
12	ST－20埋土	不詳骨片（イノシシ臼歯片？）	
13	ST－20埋土	不詳骨片（イノシシ切歯片？）	
14	ST－06埋土	不詳骨片	
15	ST－23柱穴中	シカ　右けい骨下部	時代的にみてニホンジカ
16	ST－03床面直上	ニホンジカ　角	時代的にみてニホンジカ
17	SP－Ⅰ底部	不詳骨片（ウサギ切歯？）	
18	ST－03埋土	不詳骨片	
19	ST－01床面直上	不詳骨片	
20	SD－02埋土	ウシ　右第2または第3臼歯	
21	ST－18埋土	イノシシ　右下第1切歯	
22	ST－15埋土	イノシシ　右上第3大臼歯	
23	ST－18埋土	ネズミ　切歯	
24	ST－18埋土	不詳骨片	
25	ST－18埋土	不詳骨片	
26	ST－18埋土	不詳骨片	
27	SD－02埋土	不詳骨片	
28	ST－27埋土	イノシシ　臼歯片	
29	ST－27埋土	不詳骨片	
30	ST－09埋土	シカ　角の分枝部分	時代的にみてニホンジカ
31	ST－20埋土	不詳骨片　シカ 角の部分？	
32	ST－03中央土坑	シカ　シカ 角の部分 切断痕が認められる	時代的にみてニホンジカ （表面のいぼ状突起により判定）
33	ST－02埋土	イノシシ　臼歯片	
34	ST－02埋土	不詳骨片	
35	ST－02埋土	不詳骨片	

獣骨類については詳細を期するため、香川大学 地学教室 中谷英夫助手に同定を依頼した。

（表中　No.3,7,17,20,21,22,23）

炭 化 種 子

ＳＴ－０２の埋土から出土した４個（そのうち保存の良い１個をNo.1試料）、ＳＴ－２４の埋土から出土した２個（そのうち保存の良い１個をNo.2試料）、ＳＴ－０３・１５・１６、ＳＤ－０１・０２の埋土からそれぞれ１個づつ出土した炭化種子は、全て同一の、古代モモとも呼ばれる小型のモモの核である。

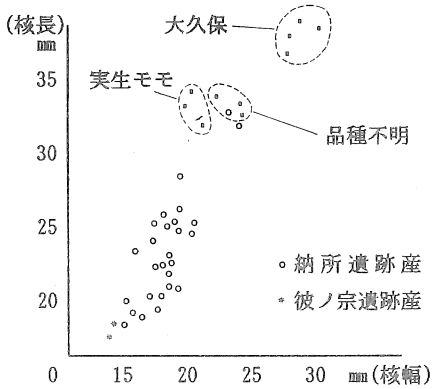
※モモの核（Ｐｒｕｎｕｓ　ｐｅｒｃｉｃａ　ＢＡＴＳＣＨ）　核の一端にバラ科特有の龍骨状の突起が縦に走り、管束孔が溝状に走り、内果皮厚く、モモ特有の粗い表面の凹凸模様をつくっている。

Ｎｏ．１試料　核長18.25㎜　核幅14.00㎜　核厚13.80㎜　内果皮　－

Ｎｏ．２試料　核長16.45㎜　核幅13.45㎜　核厚11.55㎜　内果皮 2.25㎜

核は上記のように小型で球形に近い、小清水(1962)の古代モモと呼ばれるものである。同様の核は県内では大川郡の森広遺跡などで知られているが、これほど多量の出土は珍しい。 県外では、三重県津市 納所遺跡 弥生中期･古墳前期以降、大阪 和泉･泉大津市 池上遺跡と堺市 四ッ池遺跡の弥生中期～古墳時代前期以降から知られている。

（大阪文化財センター S.55）



武田明正･塩谷格･1979に測定値を記入

炭 化 木 片

No	出　土　場　所	内　　容	備　　考
1	ＳＴ－２１床面直上	広葉樹、小片で詳細不明（環孔性であるが放射組織の発達はなし）	消失家屋
2	ＳＴ－３５床面直上	落葉広葉樹、コナラ亜属（クヌギ・アベマキに似る）	
3	ＳＴ－２６床面直上	常緑広葉樹　シイノキ	
4	ＳＫ－Ⅸ 床面直上	常緑広葉樹　シイノキ	
5	ＳＴ－３７床面直上	保存悪く顕鏡にたえない	
6	ＳＴ－１５柱穴中	広葉樹材、小片で詳細不明（孔圏部の高い材か？）	柱材の残り?
7	ＳＴ－３７床面直上	広葉樹、保存状態悪く詳細不明	
8	ＳＴ－３７床面直上	落葉広葉樹、コナラ亜属（クヌギ・アベマキに似る）	

シイノキやコナラ類は現在も普通に生育しており、近畿地方の同時期の遺跡にも普通に認められる。シイノキは暖帯域の生育樹種である。また、ＳＴ－２０の床面直上から出土した籠状の炭化物については、試料片を得ることができずイネ科植物であること以外詳細は不明。編んでいるかどうかは疑問である。

出土した獣骨・炭化木片・炭化種子については、香南町立香南中学校教諭・古市光信氏に鑑定を依頼した。

第四章　ま　と　め

旧練兵場遺跡彼ノ宗地区では、弥生時代中期中頃に初めて竪穴住居が造られており、後期を経て、弥生時代終末期には飛躍的な広がりをみせることが確認されたが、この弥生時代終末期を境にしばらくの間、人々の生活の跡を示す遺構・遺物などは全くみられなくなる。次に認められるのは掘立柱建物跡や古墳の基底部と推定される遺構群であり、これらはいずれも古墳時代後期頃の所産と考えられる。

掘立柱建物跡は2棟（ＳＢ－01・02）確認されている。この2棟は主軸方位がやや異なるものの、いずれの遺構からも北に向かってゆるやかに下る溝（ＳＤ－01・04）が延びている。建物に伴うと考えられるこの2本の溝は合流しており、北端で弘田川に流れ込んでいたようである。ＳＤ－01からは弥生土器片の他に、6世紀初めから6世紀末頃にかけての須恵器や土師器が多数出土しており、掘立柱建物跡を含めて古墳時代後期頃の所産であると判断した。また、ＳＢ－01の東側には「く」の字形に折れ曲がる溝（ＳＤ－02）が検出され、ここからは牛の顎と伴に穿孔された土師器の壺やミニチュア土器がセットで出土しており、何か特殊な祭祀が行なわれたようである。そしてＳＤ－02からは、やはり古墳時代後期の須恵器が多く出土しており、遺構の検出状況などからも、この溝の東側に中心的な遺構の存在が考えられる。これは、調査区内で検出された古墳時代の遺構や遺物が比較的少なかったのに対して、四国農業試験場から国立病院にかけての範囲からは、弥生土器と伴に多くの須恵器・土師器などが出土することからも推測される。

調査区北端で検出されたＳＤ－05・06は古墳の基底部と考えられるが、平地に存在する大型の後期古墳で、その形態も多角形を呈する特異なものである。善通寺市内では、他にも400基を越える古墳が確認されており、この地が古くは那珂郡と呼ばれ有力豪族佐伯氏の拠点であったことも知られているが、未だに古墳時代の集落遺構は発見されていない。

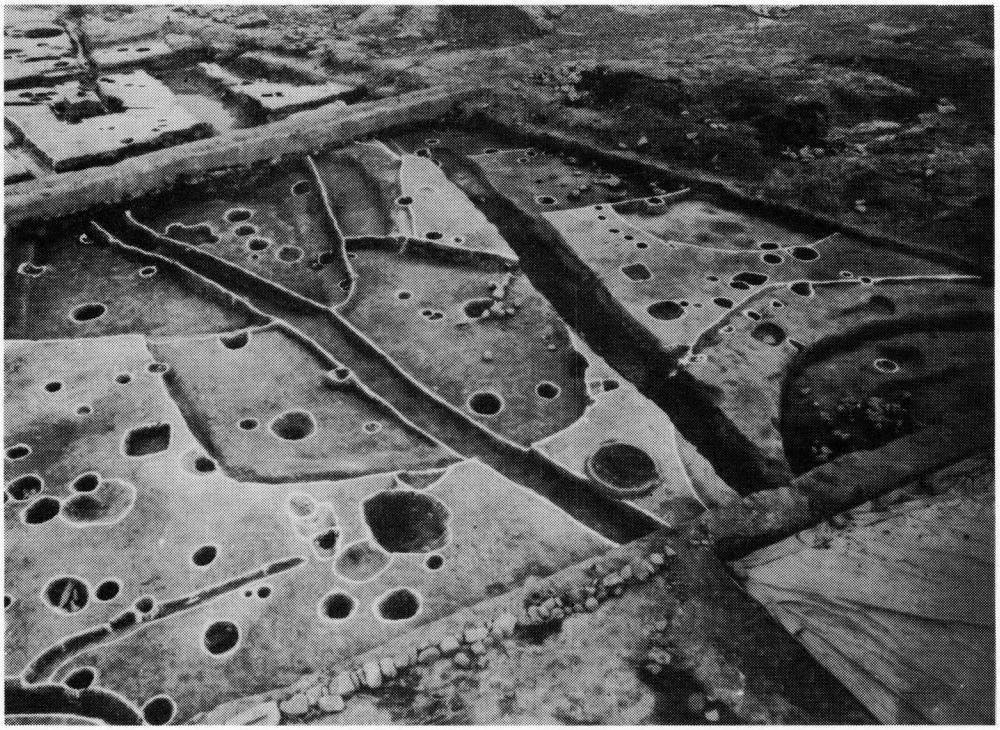
旧練兵場遺跡推定域は、四国農業試験場と香色山周辺を除けば全て市街地であり、人家が立ち並んでおり、これまでに行なわれた調査も数例しかないが、今回の調査を含めて数多くの重要な遺構・遺物が発見されている。遺跡全体を考えると、いずれも極めて断片的な資料にすぎないが、その調査の結果などから、遺跡推定域の地形は現在では平坦であるが、当時は金倉川・弘田川の支流が縦横に走り、かなり起伏に豊んだ地形であったことが考えられる。

また現在も、四国横断自動車道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が丸亀平野でも随所で行なわれ、善通寺市内でも大きな成果を上げている。これらの調査結果を踏まえた上での、旧練兵場遺跡及び周辺における今後の調査が待望される。

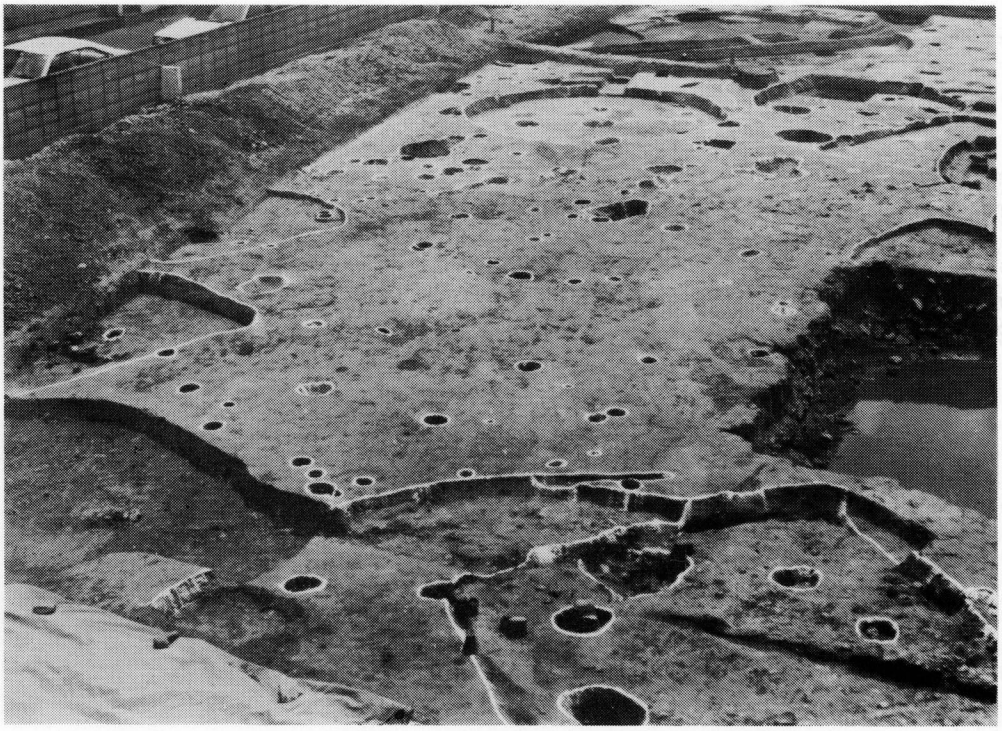
図　　版

第229図　遺構群検出状況（３ラインから北を望む）

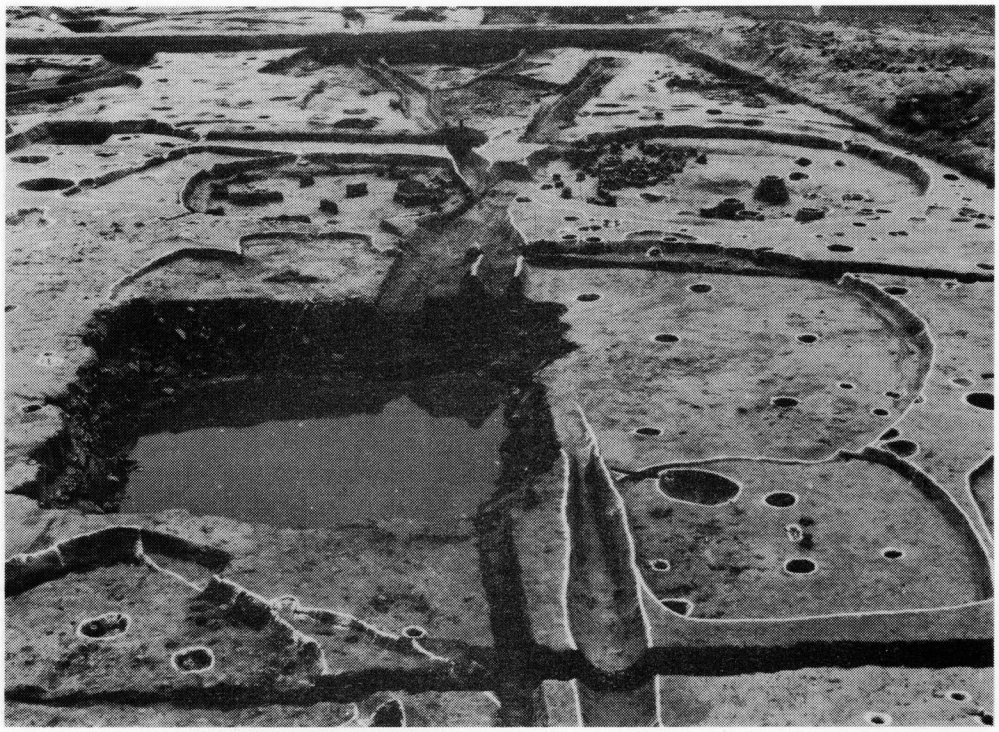
第230図　遺構群検出状況（５ラインから北東を望む）



第231図　遺構群検出状況（５ラインから北西を望む）

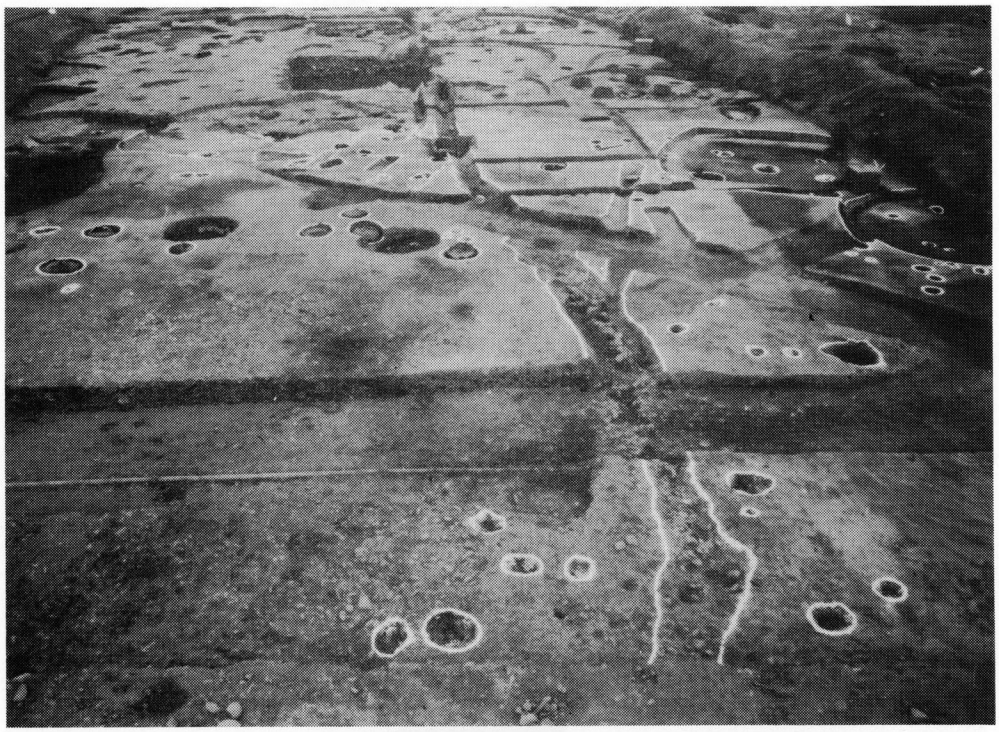


第232図　遺構群検出状況（７ラインから北東を望む）



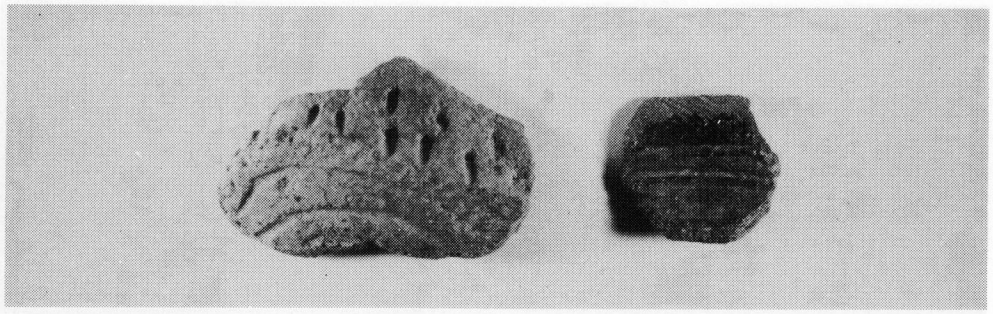
第233図　遺構群検出状況（７ラインから北を望む）

第234図　遺構群検出状況（７ラインから北西を望む）

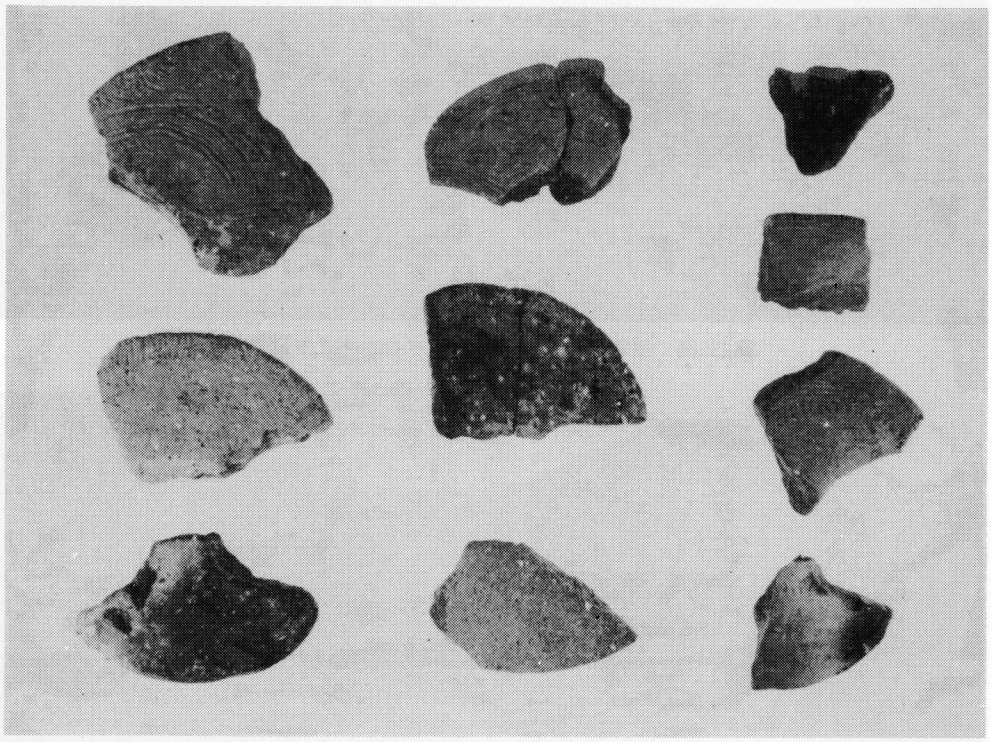


第235図　遺構群検出状況（９ラインから北を望む）

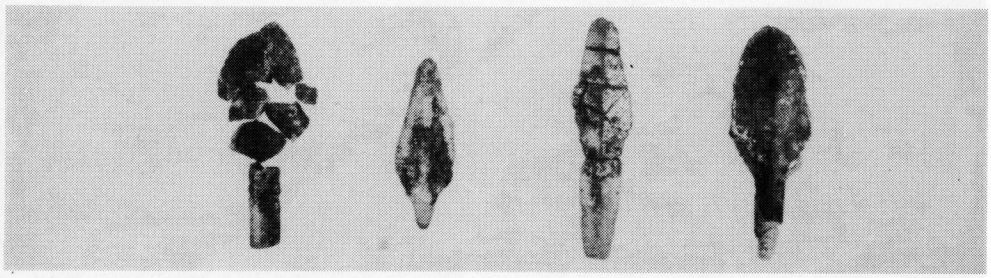
第236図　遺構群検出状況（11ラインから北を望む）



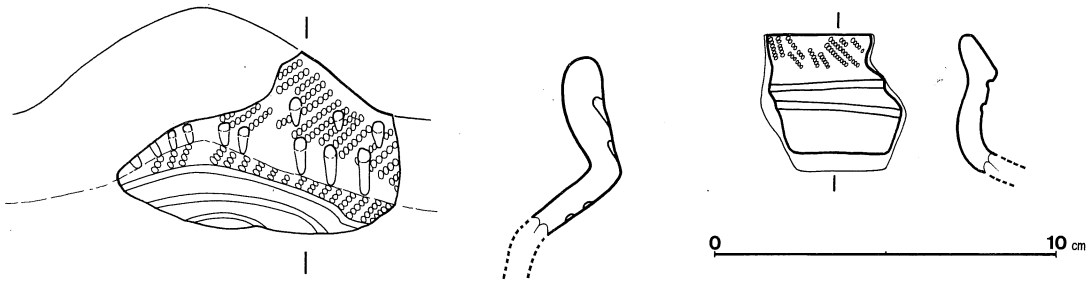
第237図　縄文土器



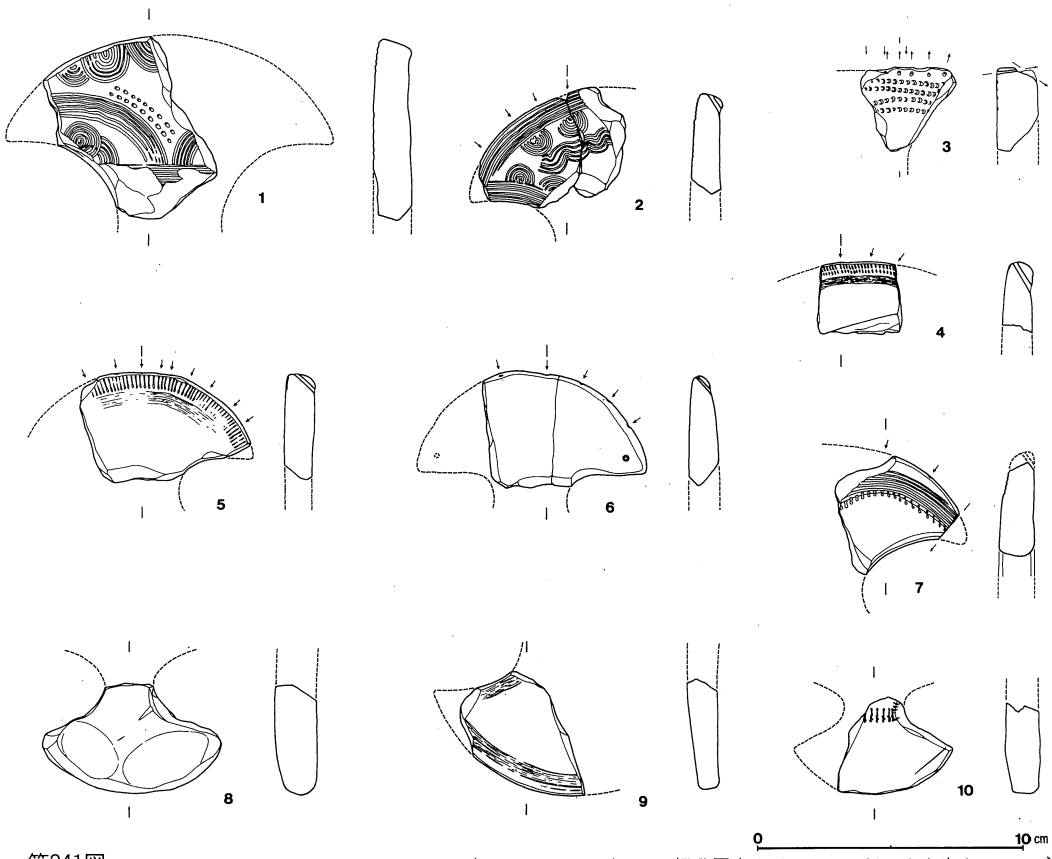
第238図　分銅形土製品



第239図　銅　　鏃



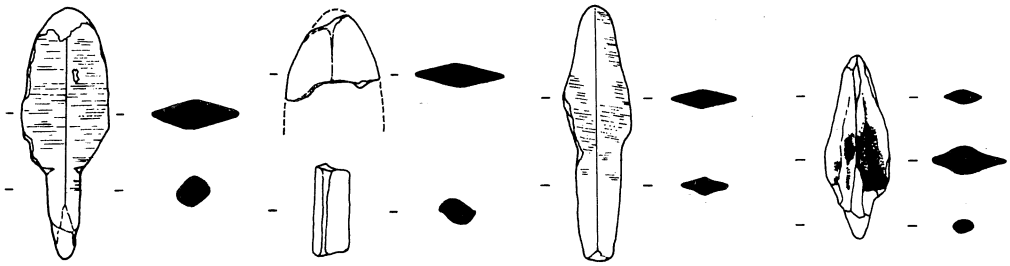
第240図　縄文土器実測図(左からＳＴ－20埋土中・Ｄ－２グリッド攪乱層出土)



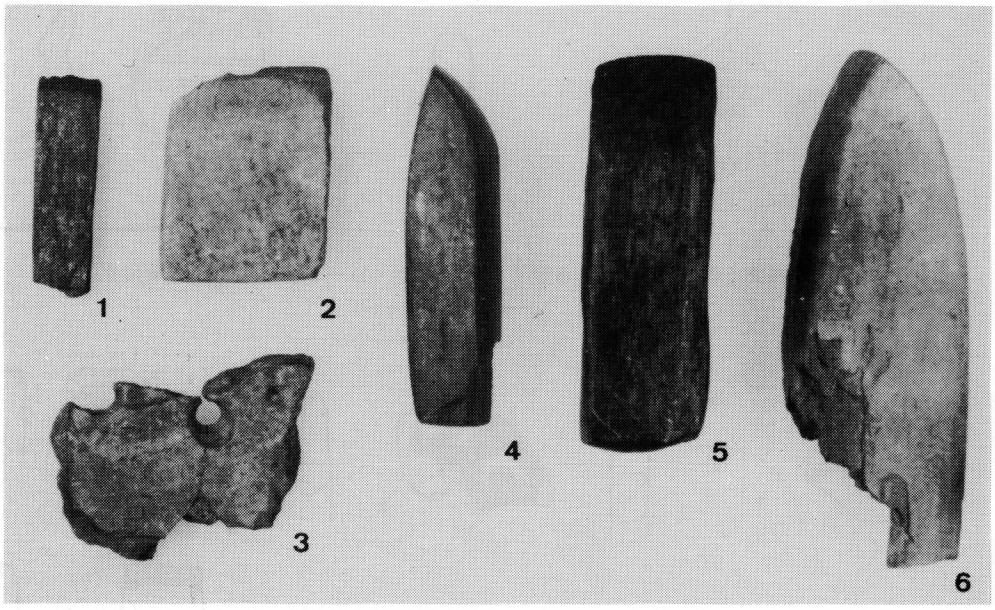
第241図

分銅形土製品実測図

1. ＳＴ－24埋土中出土 2. Ｃ－７グリッド攪乱層出土 3. ＳＴ－01埋土中出土
4. ＳＤ－02埋土中出土 5. Ｄ－１グリッド攪乱層出土 6. Ｃ－９グリッド攪乱層出土
7. ＳＸ－09壺棺内出土(混入) 8. ＳＴ－21埋土中出土 9. Ｅ－１グリッド攪乱層出土
10. ＳＫ－Ⅱ出土

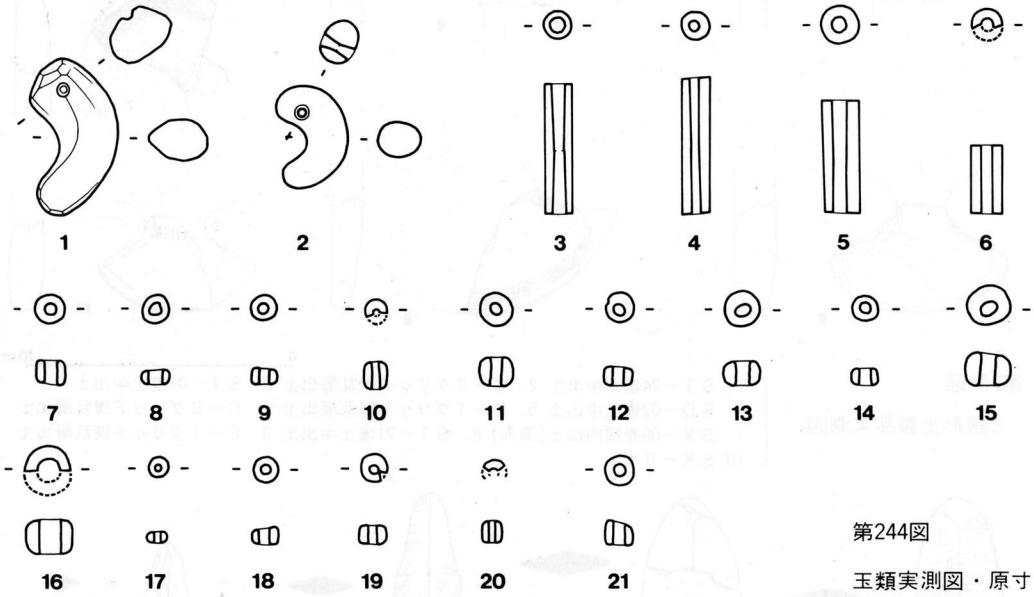


第242図　銅鏃実測図・原寸(左からＳＤ－05埋土中・ＳＴ－15・ＳＴ－24・ＳＤ－02埋土中出土)



第243図　磨製石器・原寸

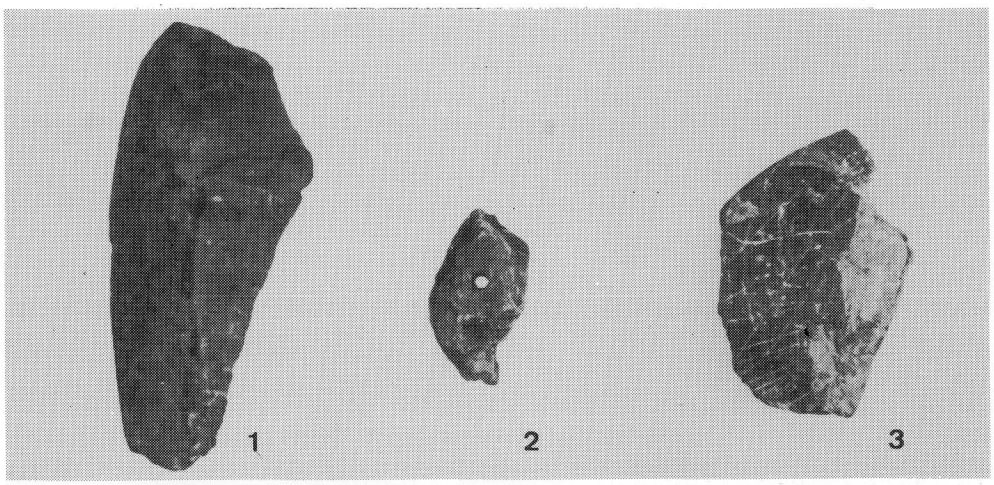
扁平片刃石斧(1．ＳＴ－19埋土中出土 2．ＳＴ－08出土) 石包丁片(3．ＳＤ－01埋土中出土)
柱状片刃石斧(4．Ｃ－８グリッドのピット出土 5．ＳＴ－08出土 6．ＳＴ－33出土)



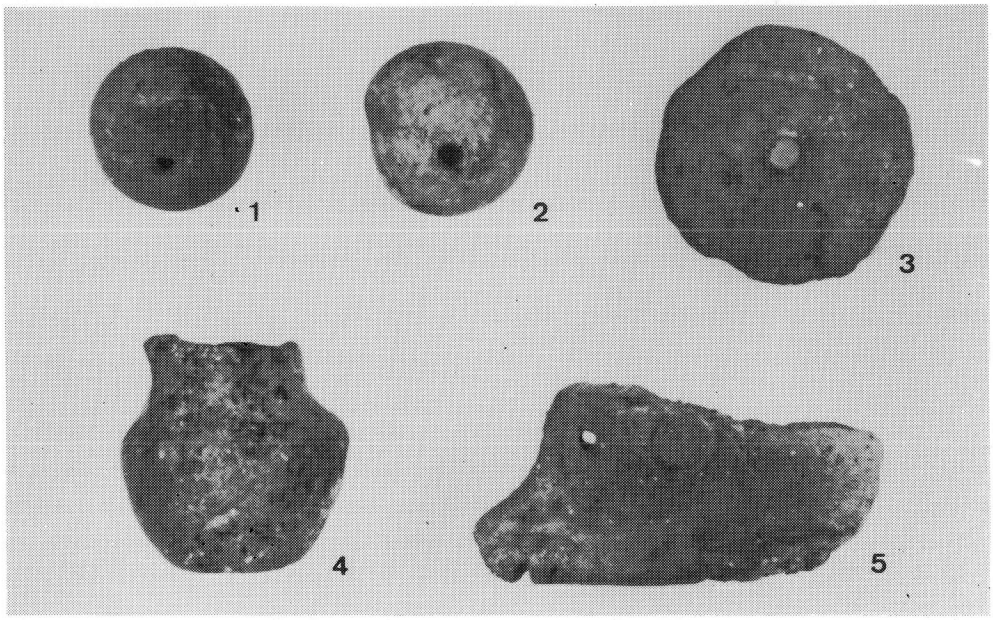
第244図

玉類実測図・原寸

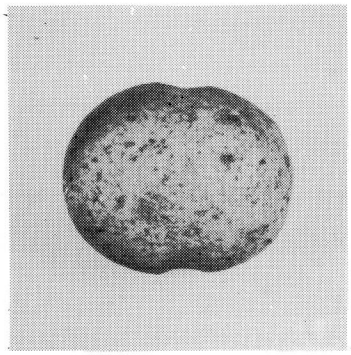
硬玉製勾玉(1．ＳＴ－24出土 2．ＳＴ－12出土)
碧玉製管玉(3．ＳＴ－13出土 4．ＳＴ－26出土 5．ＳＴ－29出土 6．ＳＴ－30出土)
ガラス玉 ｛7．ＳＴ－24出土 8．Ｃ－６グリッド攪乱層出土 9．Ｅ－５グリッド攪乱層出土 10．ＳＴ－25出土
11．ＳＴ－27出土 12・13．Ｃ－６グリッドのピット出土 14．ＳＴ－20出土 15．ＳＴ－26出土
16．Ｃ－４グリッド攪乱層出土 17．ＳＤ－05埋土出土 18．Ｂ－９グリッド攪乱層出土
19．Ｃ－４グリッド攪乱層出土 20．ＳＸ－07壺棺内出土(混入) 21．ＳＴ－12出土｝



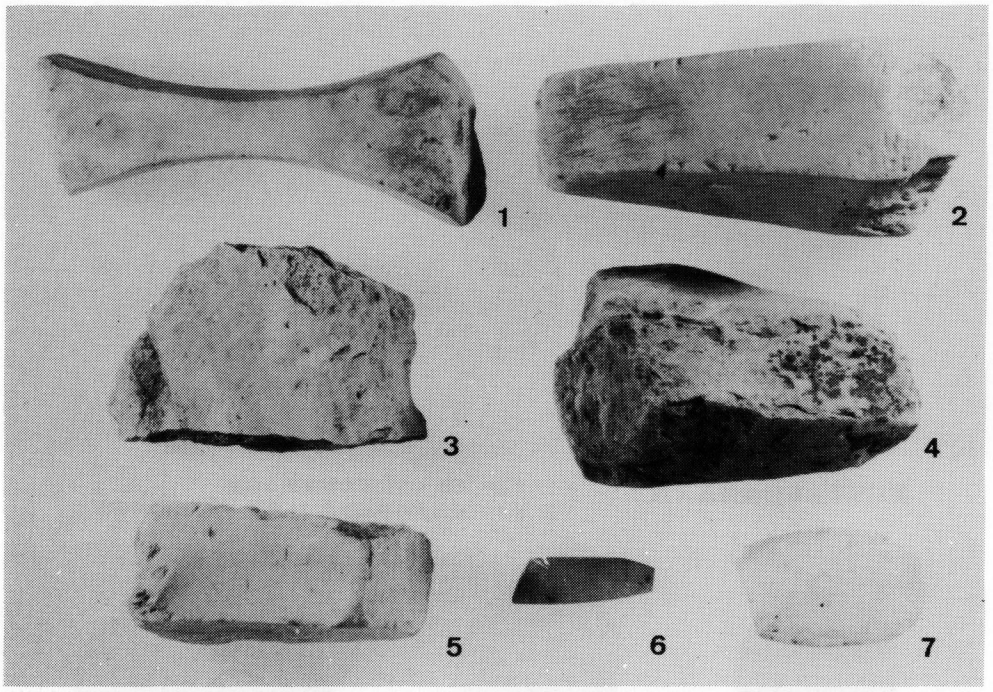
第245図　石製模造品・原寸　（1．ＳＤ－05出土の粘板岩製磨製石製品
2．ＳＴ－29出土の滑石製品 3．ＳＴ－04出土の滑石製品）



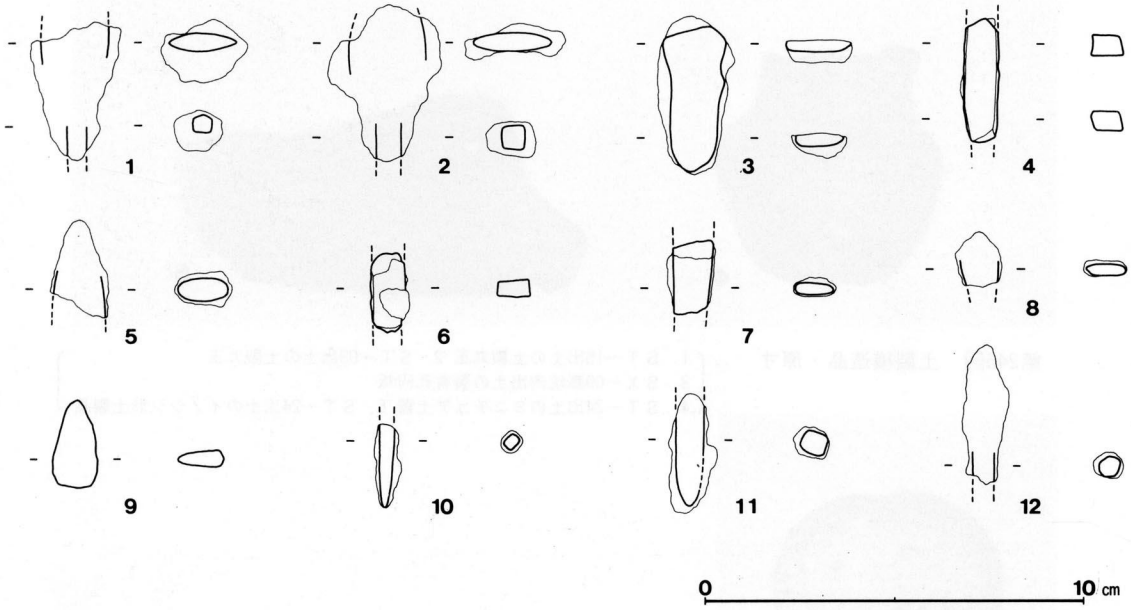
第246図　土製模造品・原寸　（1．ＳＴ－15出土の土製丸玉 2．ＳＴ－09出土の土製丸玉
3．ＳＸ－09墓坑内出土の製有孔円板
4．ＳＴ－24出土のミニチュア土器 5．ＳＴ－24出土のイノシシ形土製品）



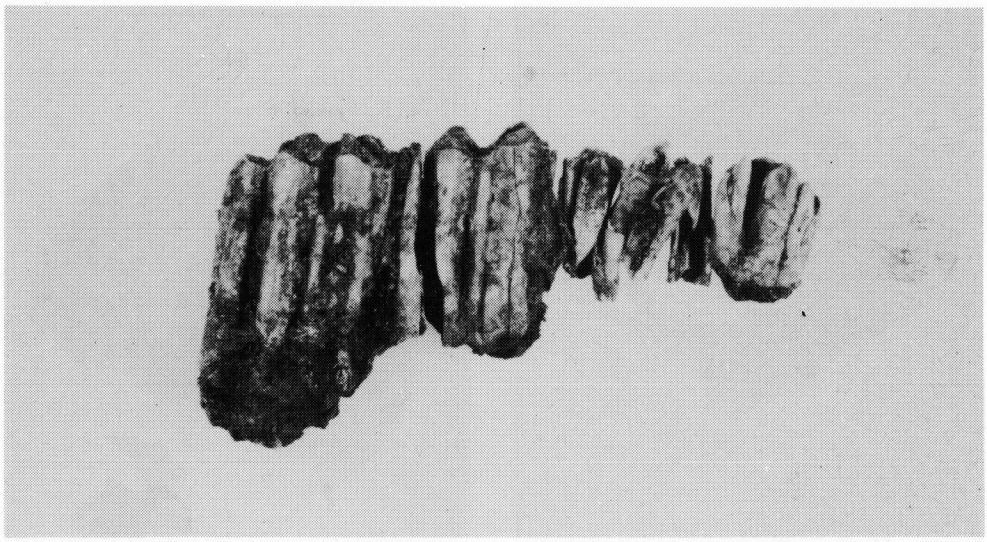
第247図　有溝石槌・１：３（ＳＴ－35出土）



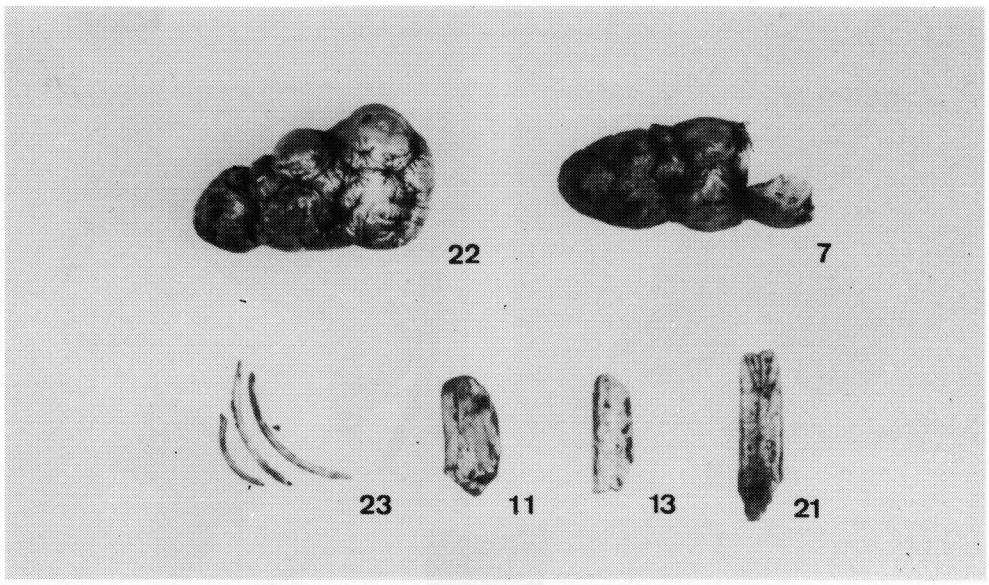
第248図　砥石・1：3　（1. ＳＴ－21出土 2. ＳＴ－12出土 3. ＳＴ－09出土 4. ＳＴ－20出土 5. ＳＴ－02出土 6. ＳＴ－12出土 7. ＳＴ－21出土）



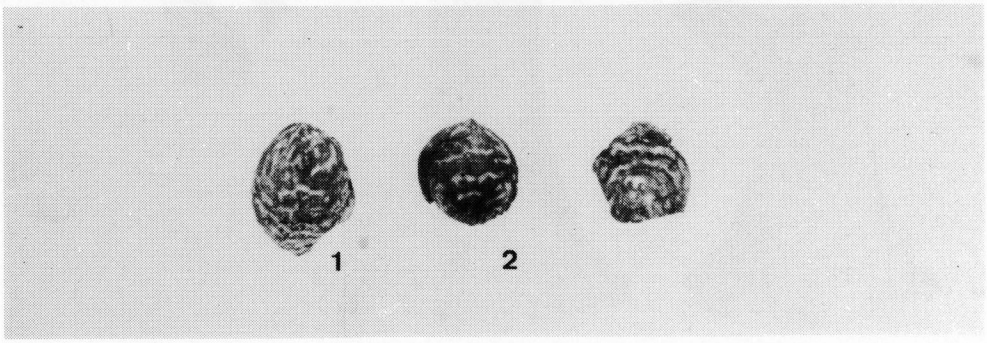
第249図　鉄器片実測図　（1. ＳＴ－21出土 2. ＳＴ－31出土 3. ＳＴ－33出土 4. ＳＤ－02出土 5. ＳＴ－24出土 6. ＳＴ－09出土 7. Ｃ－４グリッド攪乱層出土 8. ＳＴ－20出土 9. ＳＴ－35出土 10. ＳＴ－09出土 11. ＳＴ－09出土 12. Ｄ－６グリッド攪乱層出土）



第250図　ＳＤ－02出土の牛顎骨・１：２（土師器の壺・ミニチュア土器が伴出）

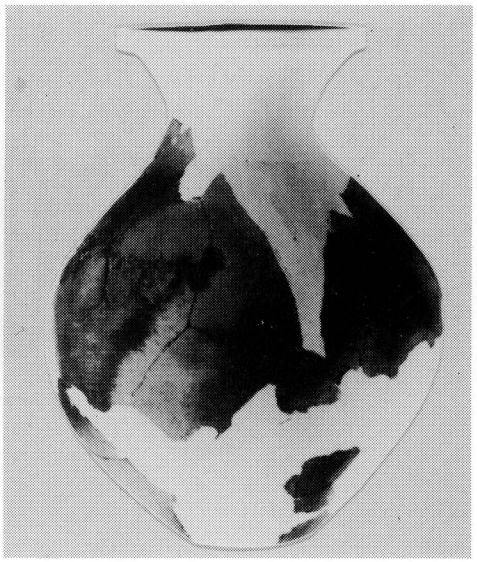


第251図　獣骨類・原寸（番号はＰ.154獣骨類分折表の試料No.）

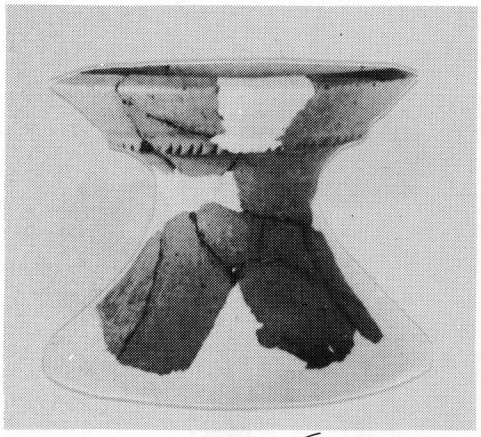


第252図　炭化種子・原寸（番号はＰ．155炭化種子分折表の試料No.）

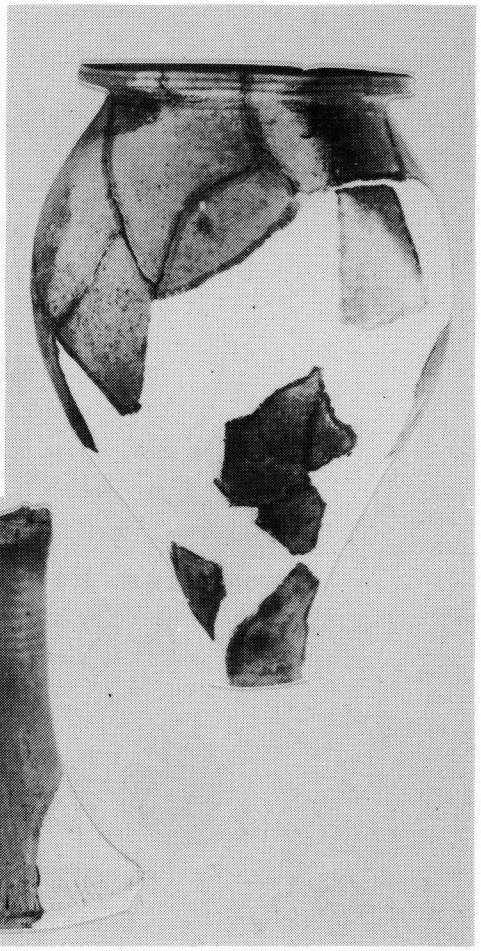
ＳＴ－08

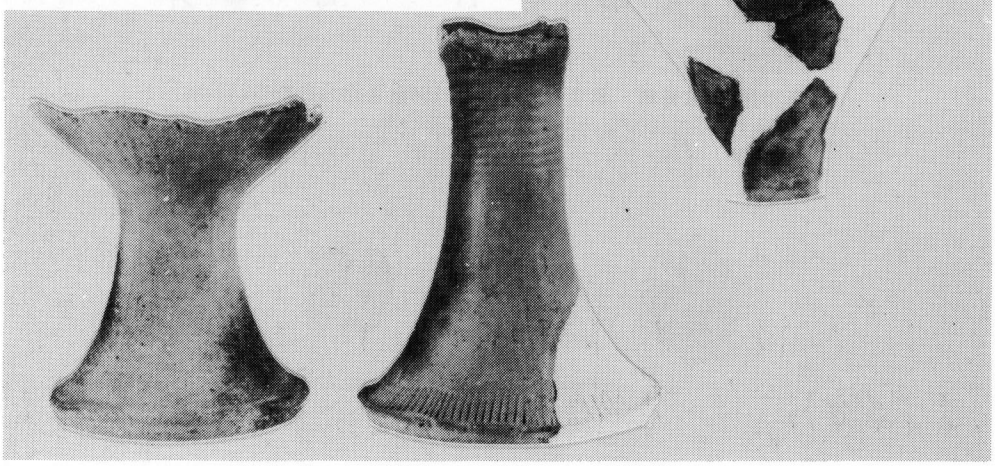


ＳＫ－Ⅴ



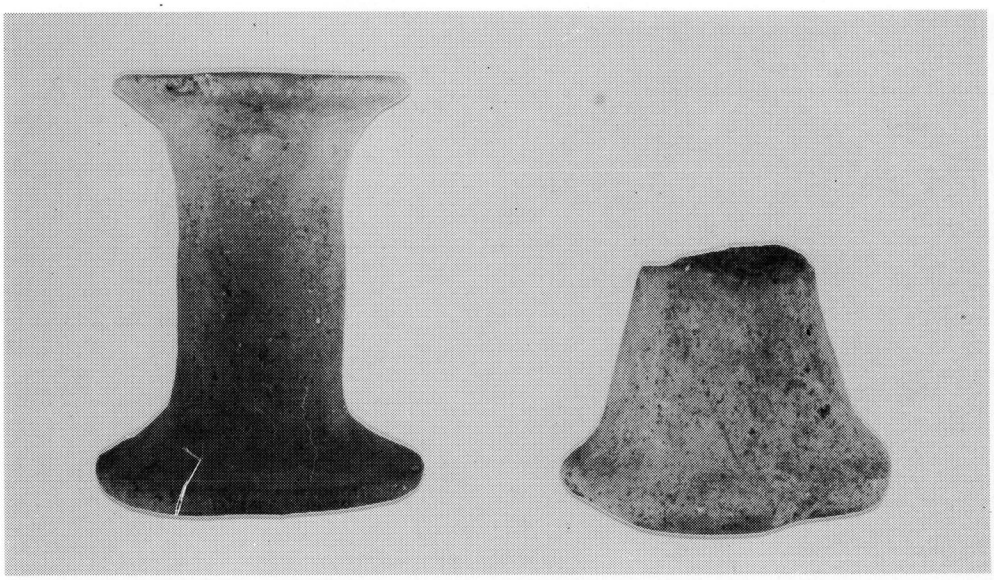
ＳＫ－Ⅲ



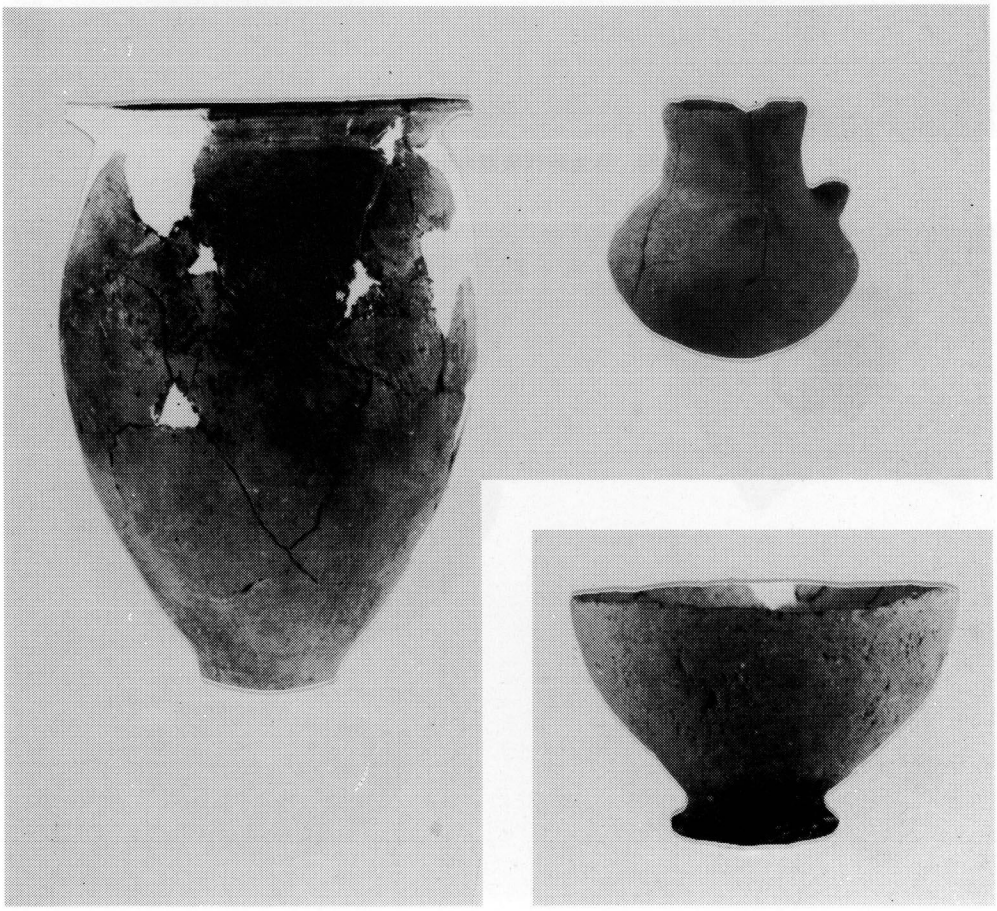


ＳＴ－19

第253図　弥生時代中期の土器

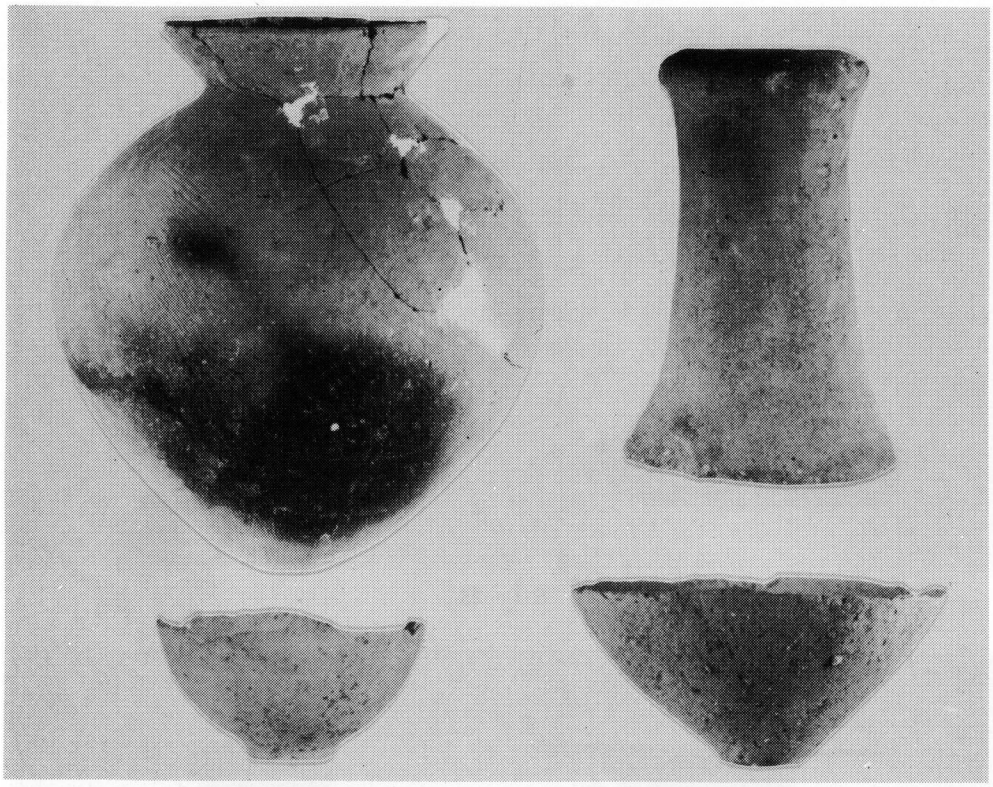


ＳＴ－23

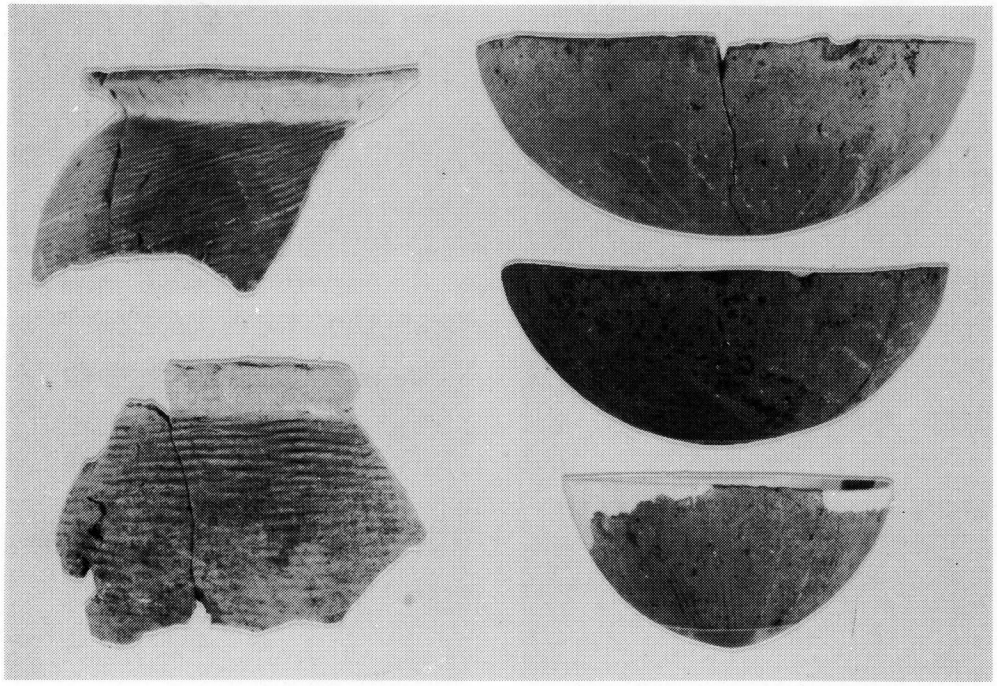


ＳＴ－13　　ＳＴ－25

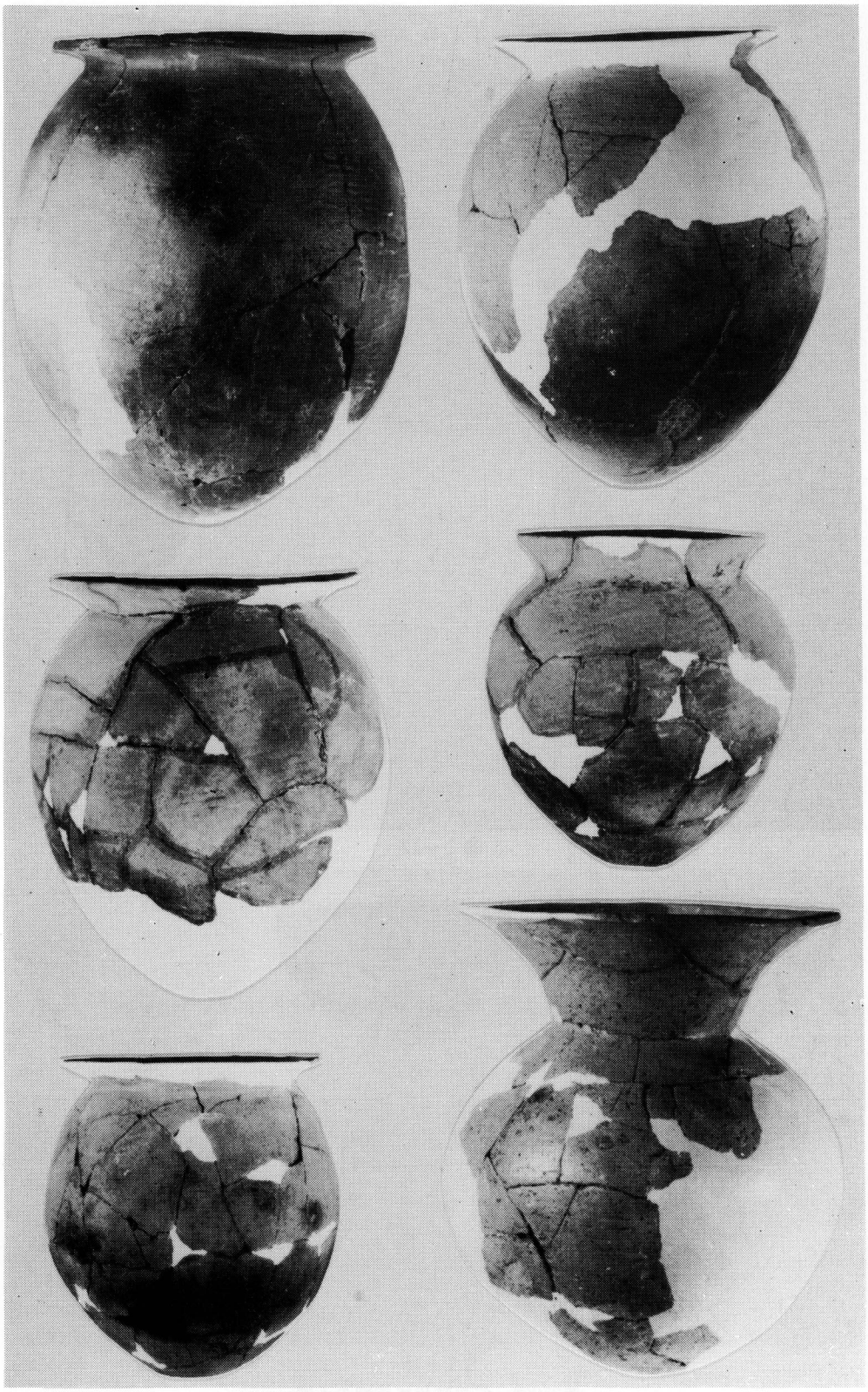
第254図　弥生時代後期の土器



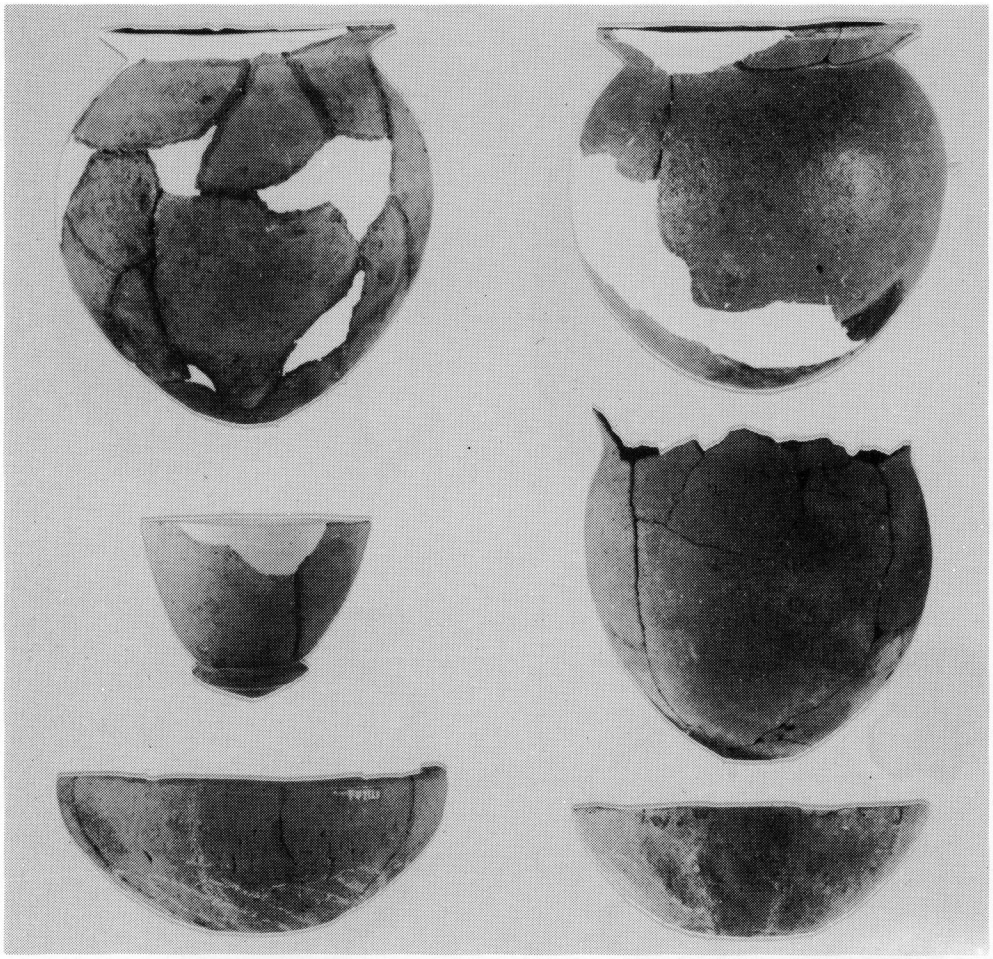
第255図　弥生時代後期の土器・ＳＴ－20



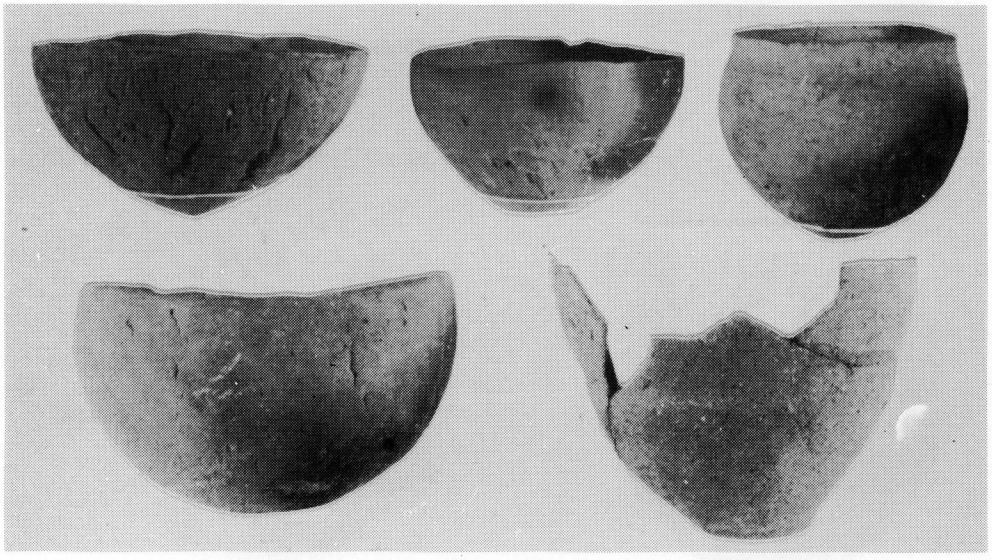
第256図　弥生時代終末期の土器・ＳＴ－09



第257図　弥生時代終末期の土器・ＳＴ－12

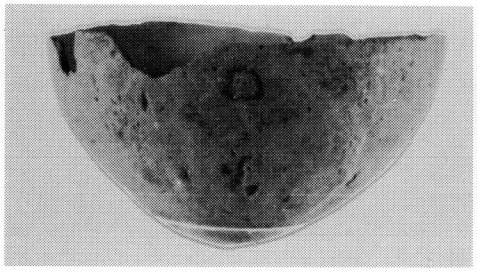


ＳＴ－12



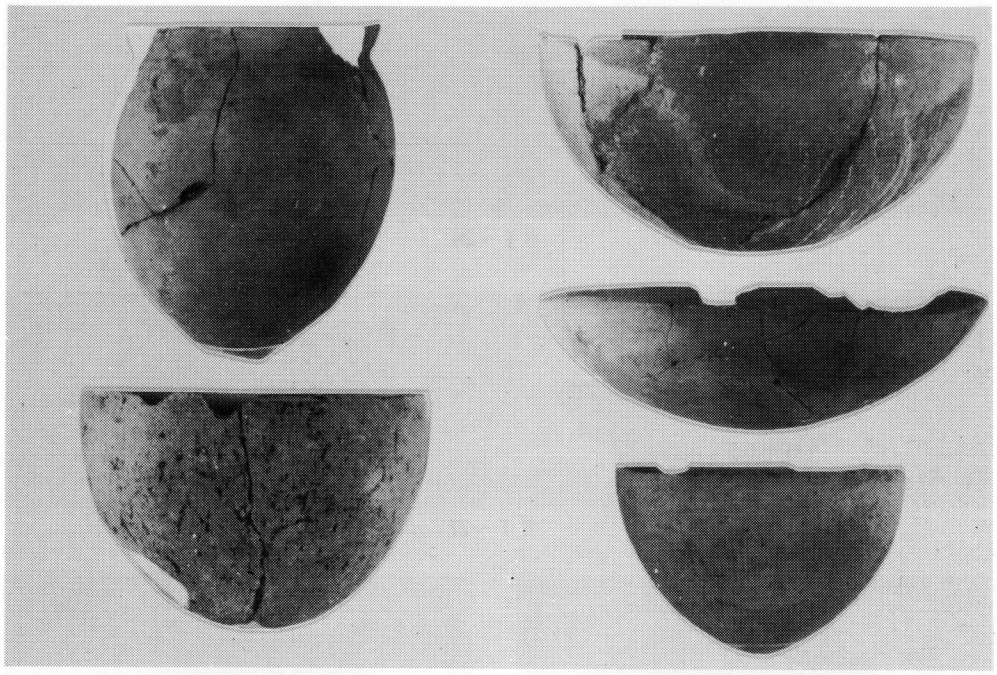
ＳＴ－15

第258図　弥生時代終末期の土器

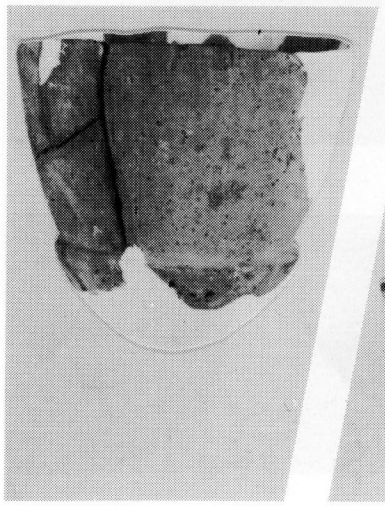


ＳＴ－17

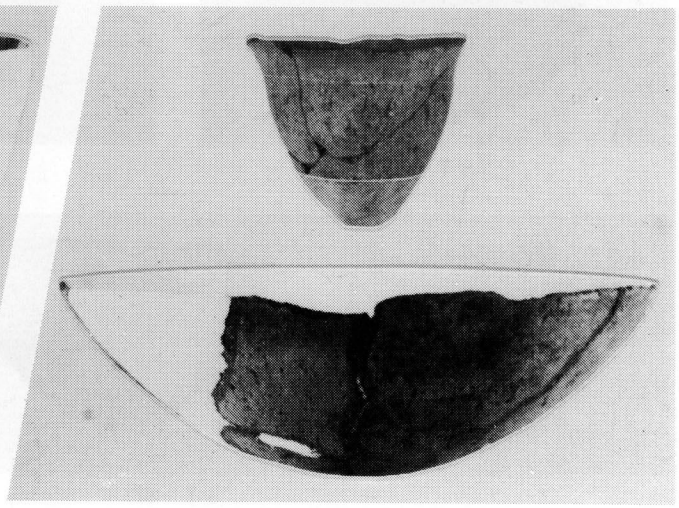
ＳＴ－18



ＳＴ－21

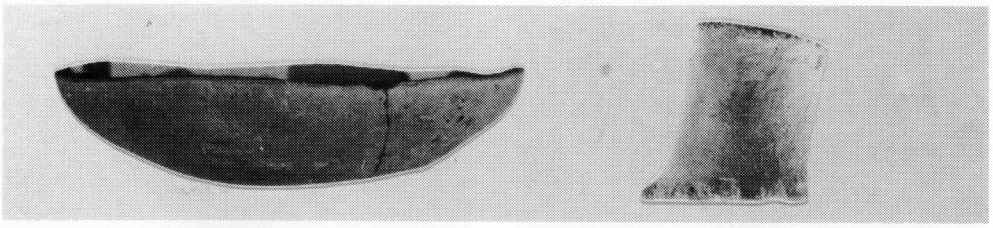


ＳＴ－22

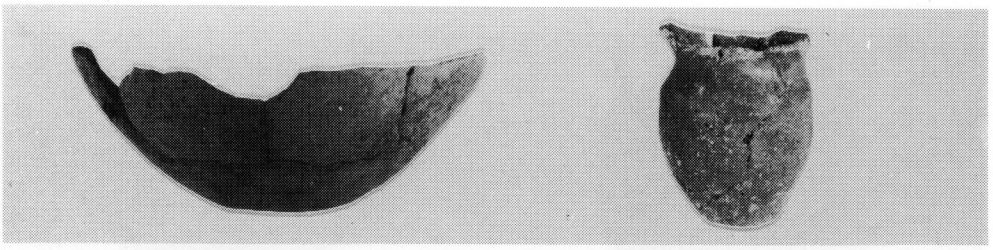


ＳＴ－24

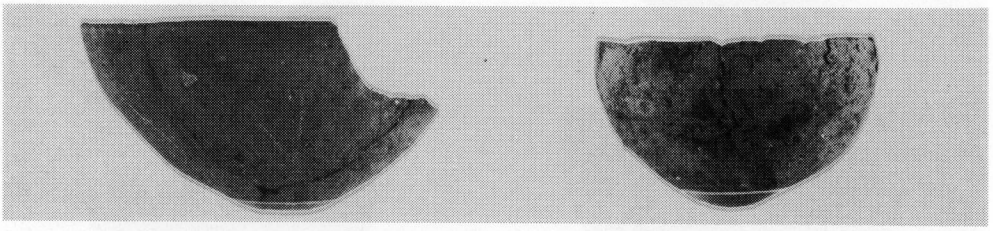
第259図　弥生時代終末期の土器



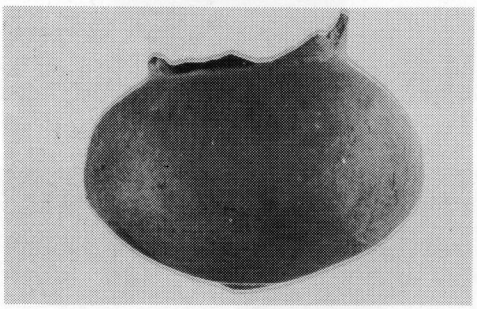
ＳＴ－01



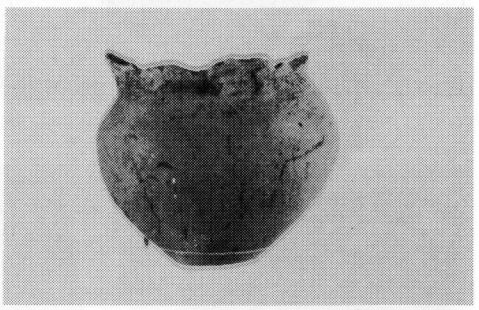
ＳＴ－26



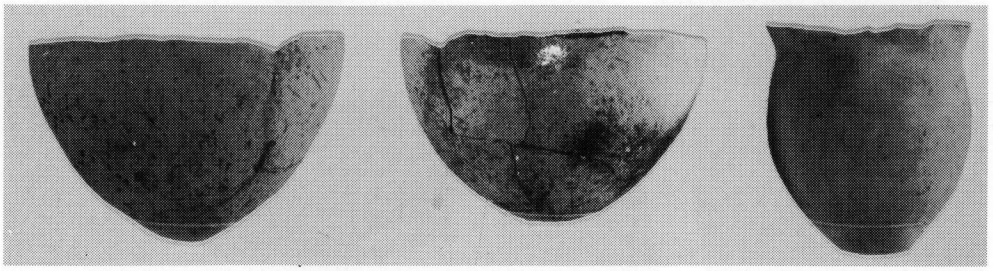
ＳＴ－27



ＳＴ－30

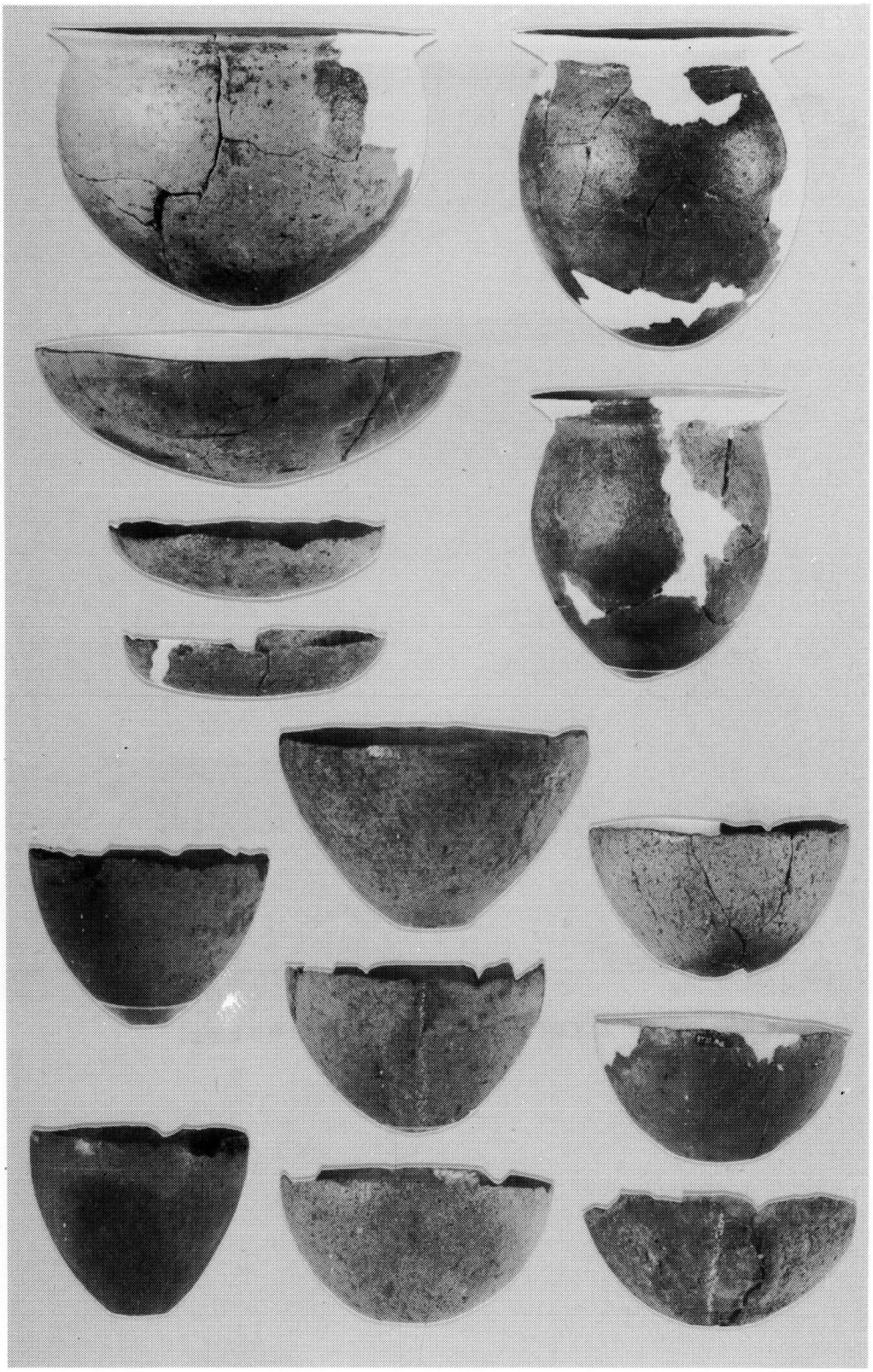


ＳＴ－33

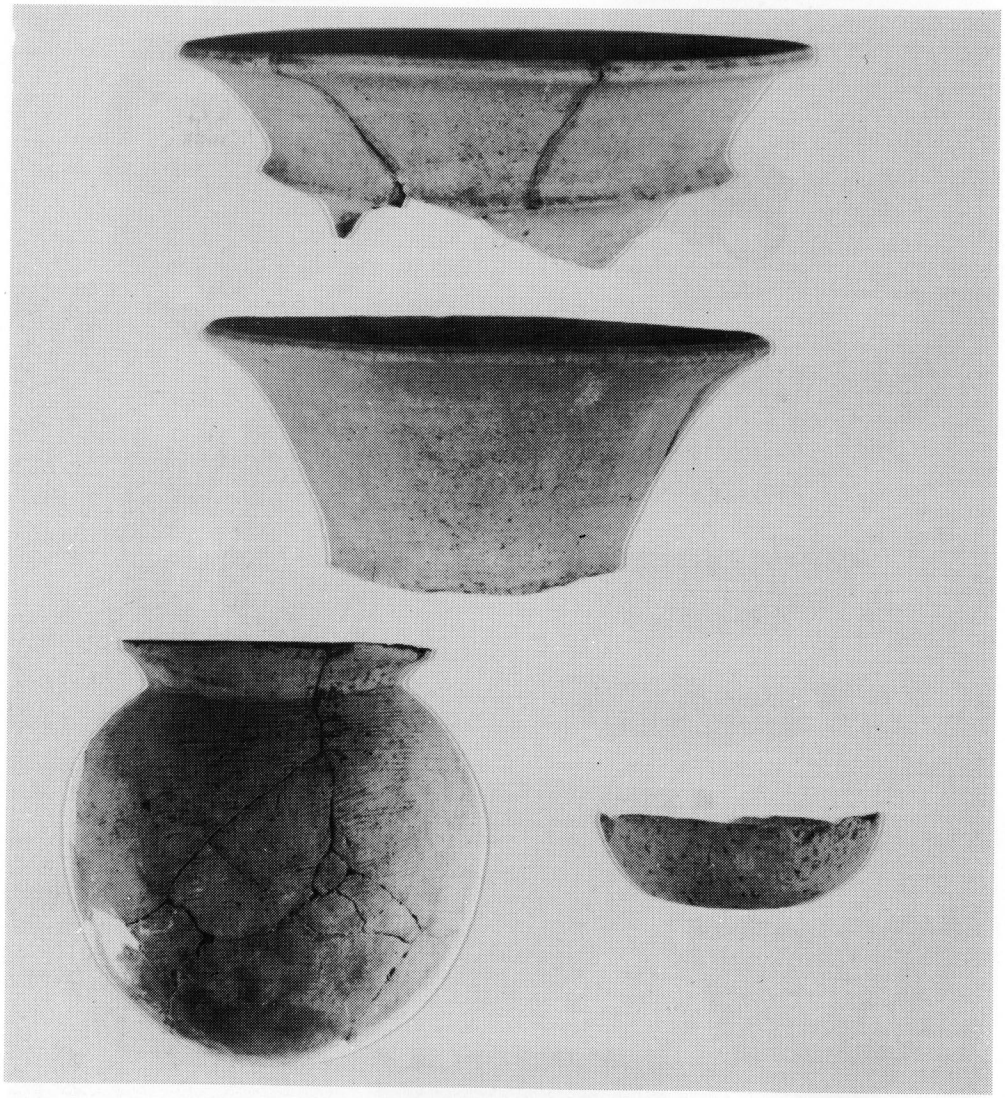


ＳＴ－32

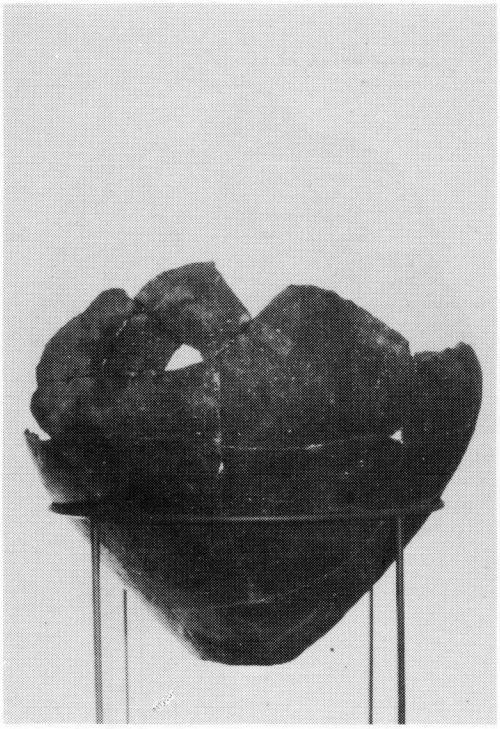
第260図　弥生時代終末期の土器



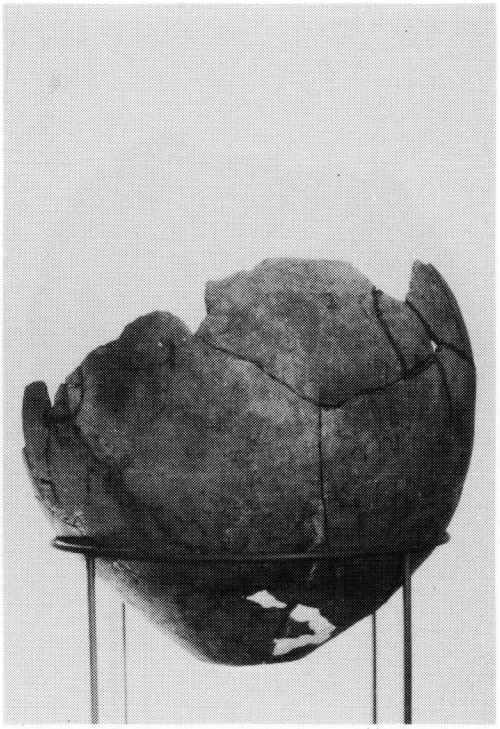
ＳＴ－31
第261図　弥生時代終末期の土器



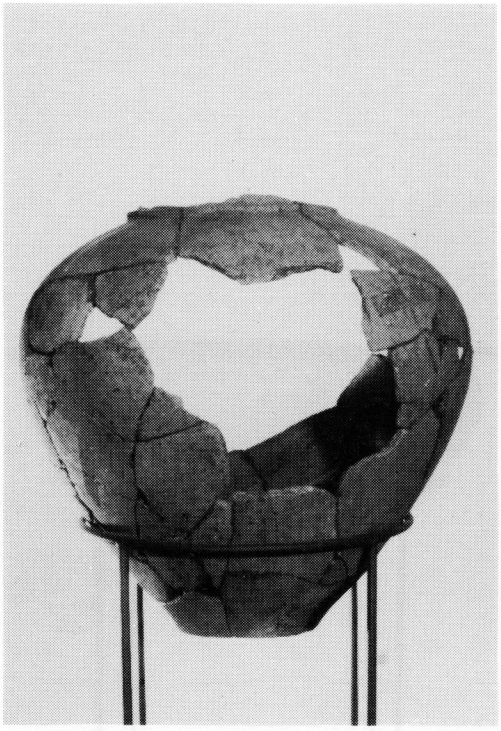
第262図　弥生時代終末期の土器（ＳＴ－15Ⅱ層直上出土）



S X－01



S X－04

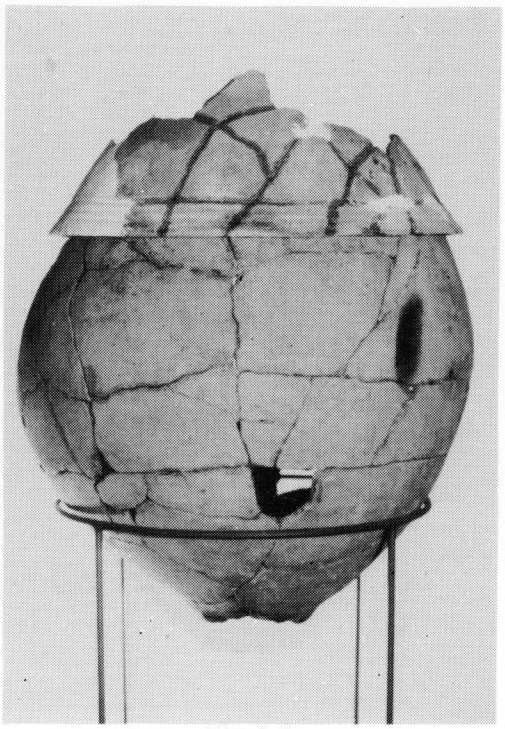


S X－02

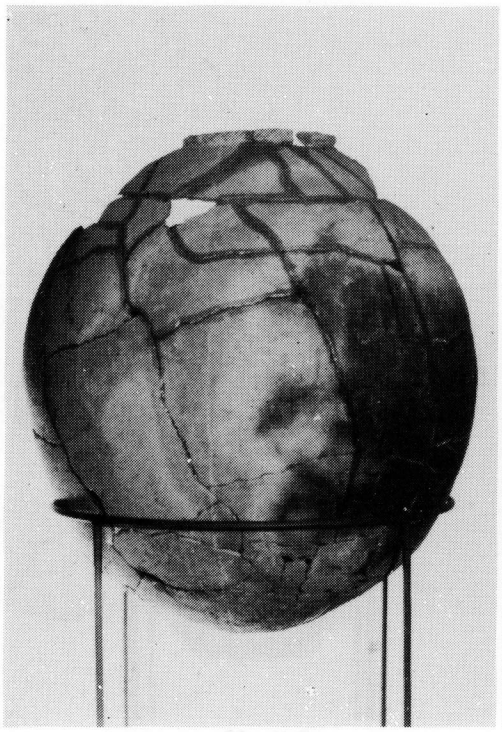
S X－02

第263図　小児壺棺

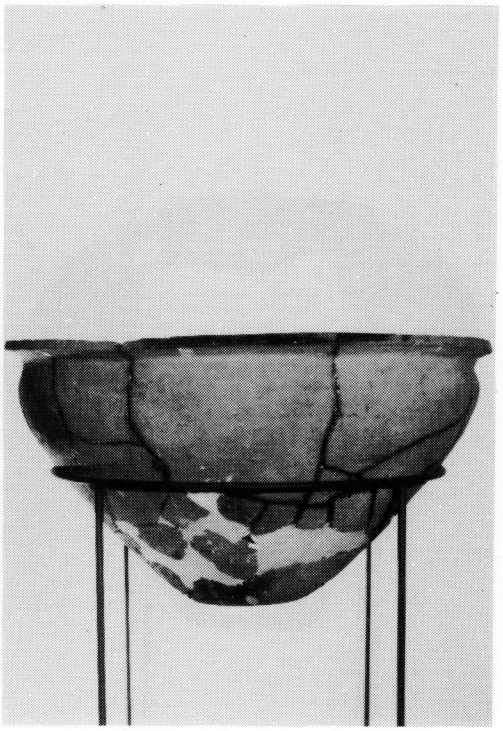
S X－03



S X－03

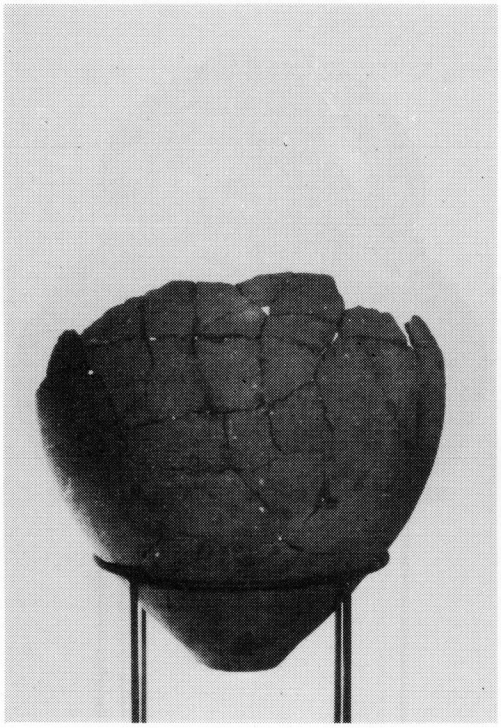


S X－05

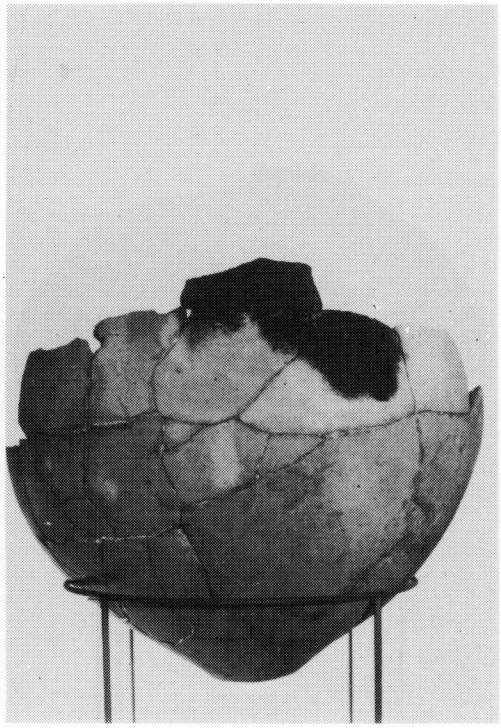


S X－05

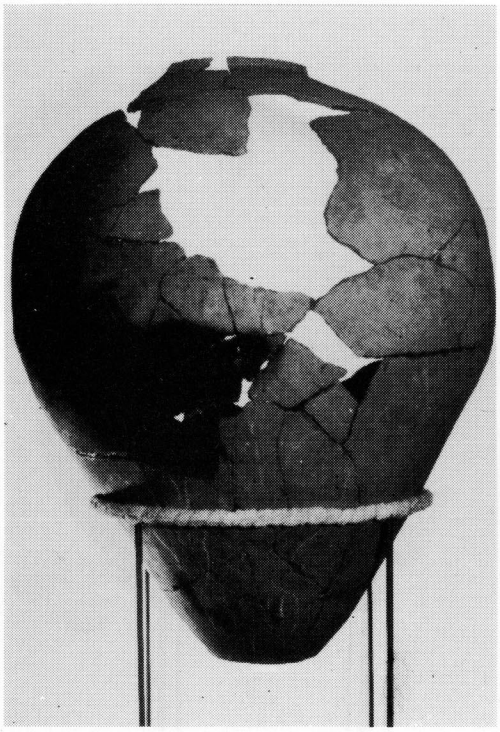
第264図　小児壺棺



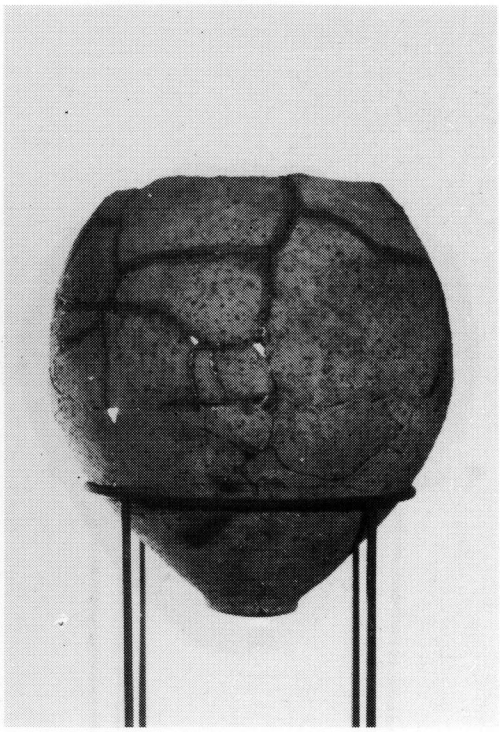
S X－06



S X－07

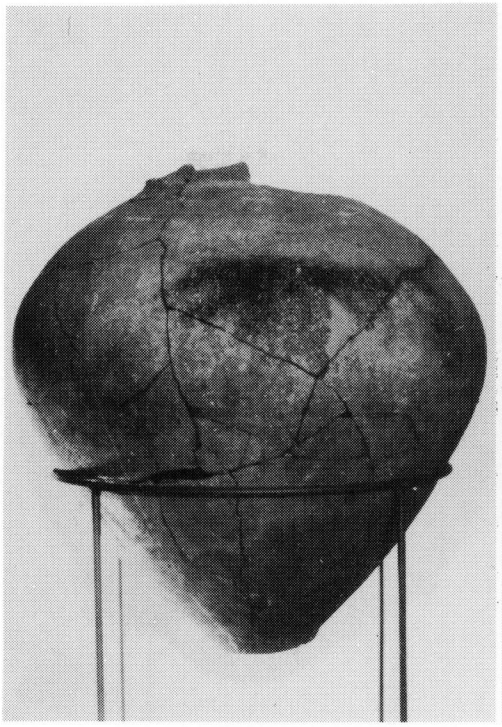


S X－09

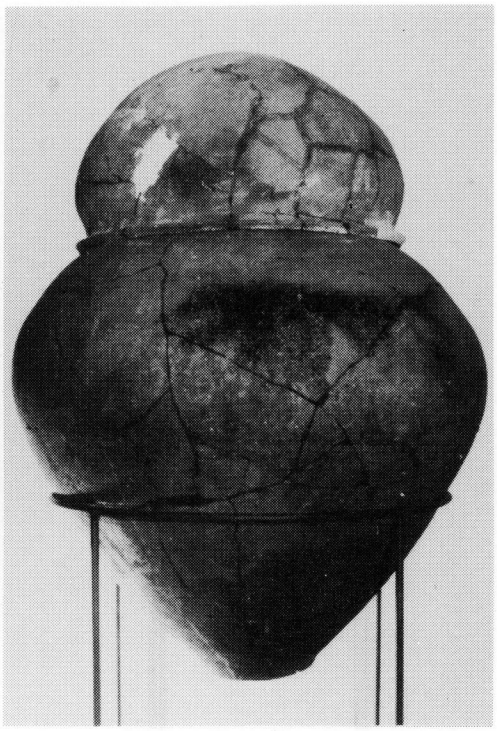


S X－11

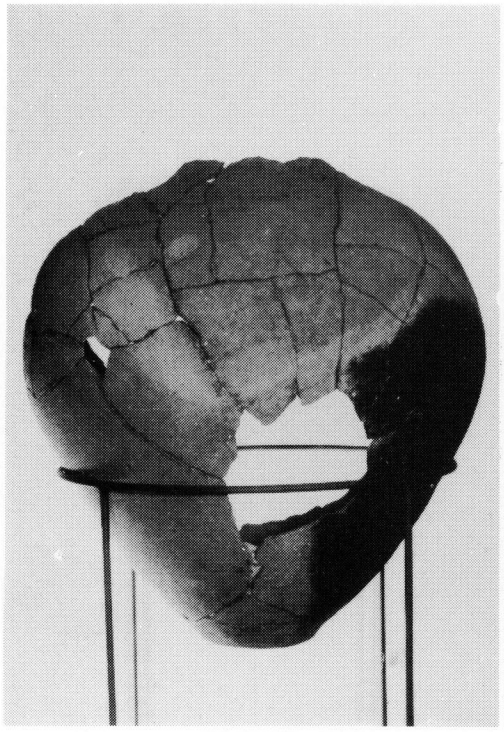
第265図　小児壺棺



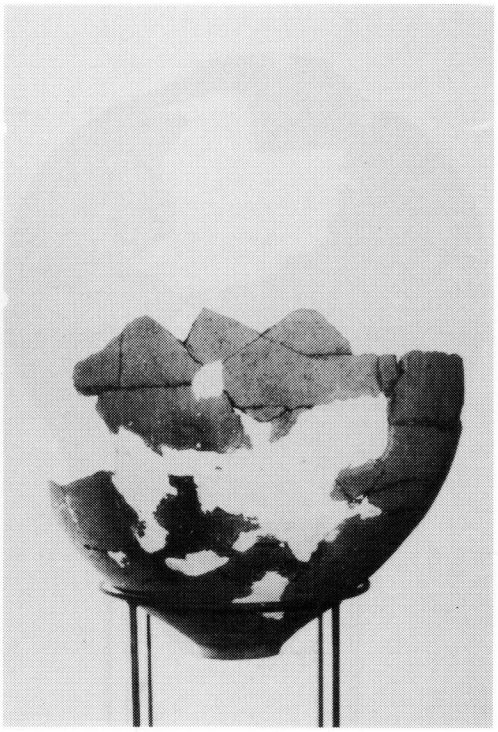
ＳＸ－10



ＳＸ－10



ＳＸ－13



ＳＸ－12

第266図　小児壺棺